
オレと死神 Smile of Cruel Angel

飛焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレと死神 S m i l e o f C r u e l A n g e l

【Nコード】

N 4 7 2 7 P

【作者名】

飛焰

【あらすじ】

リメイク版。むしろ真章（誤字ではない）開幕。それ故に前作をみたほうが分かりやすいかも。因みにリメイクといいつつも実際は第二期で、前作（第一期（以下、無印））の以後の部分は意図的に投稿しないで、これがある程度進むと開放される仕様という、ギャルゲーを彷彿とさせる無駄設計。取り合えず無印を見たほうが分かりやすい確実に。

けれども、一応は見なくても作品について来られるように調整はしていくつもりなんでよろしくお願いします。とりあえず作者のグ

ダグダした話はいらねえ！←からがあらすじだア！野郎ども可愛らしい女性の皆様、そんじや久々に言ってみよう！初見さんはちよつと覚えてね！刮目せよ！残酷な天使の微笑みを！生まれ変わるオレと死神の世界を！

あらすじ『常に取り巻く真実が、誰かにとって知られたくない過去であるケースは多い。雨宮和也。彼もその例に漏れずそういった過去を幾つも持ち合わせて変わりのない日常を送る学生であつた。ある晩——彼の運命は動き出す。一人の死神との出会いによって……。物語は“何かが起こつた世界”から動き出す。』

【0・0】SELECT BOX

意味なく広がる劣悪な世界に、希望はありますか――？

常に取り巻く真実が、誰かにとって知られたくない過去であるケ
ースは多い。

嘘きょとか真まことか。

それは、誰もがついてしまう、自分の偽りごと。

それは、誰もがついてしまう、見栄を張った言葉。

それは、誰もが送ってしまう、自分の生きた道筋を。

クラスの中心となり談笑を繰り広げる彼女。

そう、例えば彼女は進学する前は地元から離れた学校で酷い虐め
にあっていたかも知れない。

話し方から仕草までも、あらゆる接し方を改め、過去の自分を忘
れるために偽ってるのかもしれない。

非常にその滑稽な姿、その皮を剥がして見ると非常に醜悪でしか
ない。

彼女が虐げられたのは劣等感かもしれない。

彼女自身に問題があったのかもしれない。

だけど、それは結局のところ彼女の知られたくない、『誰かが知
ってる』過去である。

もし、過去に虐められた経験が白日のもとに晒されたのなら、慰
めなど彼女には届かない。

やっと出来た友人に遠ざかれるのは目に見えている。

くつたいたい笑顔を浮かべて、それまで送った日常のように笑顔を向けれる人間はいるのだろうか？

人は、誰しもそこまで強くはない。

それ故に、哀れである。

世の中には理不尽な過去せかいが回っている。

だから過去せかいは醜悪だ。

過去には、例え一刹那でも戻れない。

それ故に、誰しもが過去に囚われる。

そんなのは、覆滅ふくめつして亡くなればいい。

自分を裏切った過去せかいなど。

自分を絶望させた過去せかいは。

過去を覆して、それを全て滅ぼせばどれ程、人は楽なのだろうか？
彼女の虐げられた過去がなければ、どれ程、彼女は友人を恐れずに振舞えるのだろうか？

だから、過去は消えてなくなればいい。

その考えは悪か？

悪であろう、今ここに在る過去を基盤に作られた世界を滅ぼすのは悪しきことだ。

だったら正義が被うか？

そうやって守るものは正義なのか？

正義であろう、まさに正義だ。偽善などではなく紛いなき正義。

美しい者を正義と呼び、醜いものは悪しきものとして虐げる世界はそうだ。

この世界がそうなのだ。

醜いものに手を差し伸べるか？

酷く歪んだ頬に生気の見られない劣悪として目、丸みを見せ腐った生物のような匂いを発し、倒れたら起き上がるのが困難である、そんな人物に手を差し伸べる者はいるか？

世間の評判が悪く迫害されている者に差し伸べる者はいるか？

己の醜さを知っていて醜さを表面に出そうとせず、余計に醜い姿を晒すその者に手を差し伸べる者はいるか？

薄ら笑いを浮かべて傍観するであろう。

いるはずがない。

その者が、正しくない姿だから。

歪ゆがんだ笑いを浮かべながら手を差し出す者すら考えられないであろう。

もし、手をさし伸ばしたら相手にも周囲にもいらぬ勘違いをされかねない、そんなのはうんざりだ。

そう、悪に手を差し出す愚者はいないのだ。

同じ悪であっても……。

これが、清楚で裏表のない、可憐という言葉が似合うような者、誰から見ても整った顔立ちで、誰からも好かれそうな表情で、ひとつひとつの仕草がまかり通ってる、そんな堂々と立ってるものにはどうだ？

もし、困っていたら誰もが声をかける。

誰もが手を貸すであろう。

その者が正しい姿だから。

それが世界である。

別に、それが真理を詠^{うた}うわけでもない。
この世界のある様にある一例だ。

前述した彼女のことも、この世界にある一端。

過去に醜い悪を潜め化す愚か者。

正義と悪を二分する劣悪な世界。

歪みきつた世界は正せない。

それは“ヒト”が理性を持つよりも前から備わる“本能”である。
醜いものも、悪を糾弾することは何よりも正しいことだ。

ヒトは平等というなら、なぜ醜いものを美しきものをつくる？

優れた能力を持つものと、劣った能力を持つものを作る？

恵まれた家庭で育つものを、貧困とし明日の食事を困るものを作
った？

平等？

歪んだ平等だ。笑わせる。

「何時かはきっと」と、ありもしない夢を囁いて希望を与える者
がいる。

それで、平等なのか？ 哀れと抱かれることが平等か？

慈悲を与えられることが平等へと繋がるのか？

災難な過去を持つもの、誰にだってあると唆す。

醜きものを、きつと分かってくれる人は現れると、そうやること
で平等になるのか。

意味なく広がる劣悪な世界に、希望はあるのか。いや、ない。

超越した存在である“自然”は、だから言う。

それを超克した“機械仕掛けの神”も、また言う。

巡るめく季節は輪廻。延々と続く螺旋。

ひとつは、起。

物語の全てが始まり

ふたつは、承。

物語を受け継ぐ遺志を持ち

みつ々は、転。

物語は新たに繋がり

さいごに、結。

物語に残酷な結末を与え、再び結びつく

それが物語の本質。世界を彩る四季の螺旋。

螺旋の運命を誰も否定はできない。

裏表のない如実な世界は、何よりも無様で哀れだと。

——常に取り巻く真実が、誰かにとって知られたくない過去でありケ
——スは多い。

この言葉から紡がれる物語。

ああ、さよなら。四季の螺旋を描いた世界。

聞こう。君に抗う意志はあるのか？ “遺志”を持つはずの君は。

——守ってみせるさ。

——今度こそは。

——オレは、誓ったんだ。

——アイツを守るって。

今回は、君にとっては何よりも辛い世界だ。
それでも君は紡ごうとするのか？
ならば、はじめようか……物語を。

——常に取り巻く真実が、誰かにとって知られたくない過去であるケ
——スが多い。

正義と悪を紡ごう。
過去と今を紡ごう。
君には幸福と勝利を祈ろう。

——やる時にやらなきゃ、やる意味はねえよな——

SELECT BOX BLACK & TOY

黒い箱と玩具箱を用意した。開けてみるがいい……。

Replayをしよう。何かが起こった世界から。

——オレは……。

【不気味なドス黒い箱を開けた】

【カラフルに彩られた玩具箱を開けた】

【0・0】BLACK BOX

常に取り巻く真実が、誰かにとって知られたくない過去であるケースは多い。

もちろん、知りたくない過去でもあったりする。当然ソレはこのオレ、アマミヤカスヤ雨宮和也にもそういうのはあるってことであって……。

「ははは！！ 泣いてるじゃないか和也」

「うつせーよ……」

豪快にが似合うほど笑われた“それ”を封じ込めたはずのアルバム。それがよりにもよって見られたくない奴に見られてるという現状には、少し悲しくなってしまうものがある。そんなオレはアルバムの中にある、この写真を豪快に笑ってくれたオレの振られたくない過去である一枚の写真を、オレも後ろから覗いて見る。

半べそになつて、容姿も体格も幼い少年が写っていた。まあ、事実上どうあがいても覆らないであろう、オレが幼稚園の時にスキー研修ですべて転んで痛くて泣いている。そんな、酷く滑稽な写真である。残念なことにはいちいち覚えてる程、大層な記憶でもないため、写真などを見ない限り「こういうことあったなあ」とかしか思い出すことが出来ない。よって、そういうのを思い返すと余計に恥ずかしい訳でもある。

それに、泣いてる姿という写真はあまりにも触れられたくない過去だ。

正直、映像としての記憶は思い出せるが、それ以上は思い出せない

い。音声の荒い映画でも眺めてるような感じで、自分の事なのに不思議と、他人の人生の出来事のあらましを絵本にして聞かされてるような、曖昧で不思議な感じしかないって現状だ。さすがにここまで子供だった時の記憶なんてみんな他人の子供のときの出来事みたいに感慨はあまりないのかもしれない。だが、それが自分であるという事実は変わらずに、泣いているという過去も変わりはない。こういう時には幼馴染であるアイツがいないことが大助かりであつたりもする。おばかのくせいに記憶力だけはピカイチと本当に何をしてるかわからん。それで、いちいち昔の話をされてもムカつくだけなんだよな……ほんつと。幼稚園よりも、物心つく前から知り合ひだった相手がいると触れられたくない過去の話をすると否応なく、余計に恥ずかしい昔話になってしまう。そうなるといういると取り返しがつかなくなってしまう。主にオレのプライドが。

さて、こんな人の赤裸々な過去を探求し、人様のベッドで横になりながらアルバムを興味津々と言わんばかりに人のプライベートを覗く、このモデル体系で腰丈まである長い金髪をベッドに散らばせながら鼻歌混じりに足を動かしたりリズムをとってる者こそ、少し気恥ずかしいが、オレと恋仲——つまりは、彼女であるクレア「スイープ」であつたりする。時刻はすでに深夜ともあり男女がひとつの部屋に居るといふことはつまりは、そういうこともある。

名前から分かつての通り、日本人ではなくて外国人だ。クレアはもともとは交換留学生として異文化^{クロスカルチャー}交流に力を入れてるオレの中学校からの付き合いである。なんでそんな野郎がまだいいのかという……まあ、蒸発だ。液体が気体になる現象じゃねえぞ一応言うが。こつそりいなくなる方の蒸発だ。まあ、つまりは留学期間を終えたというのにコイツは祖国にかえらずに、ここでのうのうと生活をしてるわけである。理由は……推して知ってくれ。

もちろん、親が黙ってる訳がなく、一度ではすまなく三度ほど、どの情報源かは知らないがクレアが住まうオレの家までやって来たことがある。これで、オレも安心して一人暮らしに戻り惰眠と家庭菜園などの趣味に没頭できると思いきや、少し話してみると何をとち狂ったのか気に入られてしまってる訳だ。三顧の礼とはこういう事を意味してるのかもしれない。

因みにコイツの父親は世界最強と謂われ高い海兵隊の幹部クラスらしい。オレが逆らう道理を失ったところで、この同棲生活は一部以外から、ひじょーに有難くないが認められているものである。更に言くと酷い扱いをした時にはオレの命が一つのミッションで消え、日本との関係も悪化するかもしれない。

なんだ、この割に合わない同棲は？

とは言いつつも、最近ではコイツがこの時間にいるのは珍しいことである。

なにやら最近、巷では有名なレディースの頭になったり、こいつの凶悪さとプロモーションは（胸を除けば）いいだけあって、更には金髪などがあいまって『墮天使』とまで名付けられてる始末だ。ようは街でよからぬ集団と仲良くしてて朝に帰って夜は遊びに向かうという昼夜逆転の生活だ。

コイツ、親父が世界最強を誇る海兵隊のおえらいさんで、いろいろ教わったと聞くが……まさかようもここまでとは思ってもいなかった。オレもびつくりした。後で交流をするようになった親父ボスに聞くところ、変な虫が寄り付かないようにらしい。外国ともなれば性犯罪などは我が母国、日本と比べ物にならないらしいから別に不思議とは思わなかったが……妙に納得する節は確かに幾つもあったナ

イフの扱いや銃火器の扱い、最近に至っては……まあ、そういう体制からの奇襲も含めて伝授させているというらしい。

ハッキリ言つて、オレが悪戯でそういうのをやられては、たまつたものではない。オレの生死と別のせい……いや、なんでもない。兎に角、オレの体に被害が被るため、クレアはどんな事があつても守り抜くという男同士の血塗れた固い約束がある事を言つておく。追加しておくが、もしもの場合、オレは海兵隊を敵に回すらしいが、それはまた別のお話だ。

まあ、それは兎も角として何時までも居座られると睡眠の邪魔である。オレもこれで居て健全な思春期真っ只中の男子だ。それなりに思う所もあるが、今日は構つてる暇はない。そうそうに退けねばな。未だに布団で横になりながらジャガイモに手足、そして目や口をつけた面妖なキャラクターの描かれたスナック菓子を寝転がり、アルバムを見てだらしく口を開けて笑う——って、自分の布団じゃないからってそれはやめてくれ！

「いーかげん、どけ」

「ふっ、口ではそういつて、頭の中ではエロエロなのではないか？」

いや、すんごく普通に迷惑してるから。どいてくれない？ マジで。っていうか、マジでスナック菓子の欠片とかマジで簡便なんだけど？ わかってます？

「オレは明日がつこーなの？ Do You Understand d？」

「英語がまったくできないのに無茶して？ 何を理解しろと？」

「明日学校だから休ませろってことだよ！」

怒鳴りつけておく。一応オレは学生である身分、学校の単位など
とつてもめんどくさいものが付きまどつてゐるわけだ。その他もろも
ろに諸事情があるが、割愛しよう。オレは少し着崩れたクレアの
服装を……大きめの明らかに体に似つかわしくないワイシャツ羽織、
しがもだいぶ肌蹴させ、何よりも下着しか穿いていないという、こ
のあられもない姿を見て何とも思わない訳もない。明日に貴重な単
位さえなければ——まあ、男の本能だ。しかたないだろ？　って、
オレは誰に弁明してんだよ……？　このままでは18歳以上はお断
りな内容だ。始まっていきなりこれは不味い。

ん？　始まっていきなりってどういうことだ？　まあ、そこは別
にいいだろう。とても気にしちゃいけない話題な気がする。

そんなオレの視線に気がついたか。おもちゃを見つけたような目
でワイシャツの端を軽く持ちあげ、とんでもないポロのモデルをや
つてる女性ですら嫉妬するようなラインを、見えるか見えないかの
絶対領域を見せ付ける。もともと白くてスラッとした長い足だ、モ
デルとかそれに比ではない色気が男心をくすぐる。そんな仕草にオ
レは背中にびつちしと冷たい汗を滝のように流すのは自然の摂理で
あつて仕方ない。

この喉を通つた唾液もだ。

だ、第一に抜群のモデル体系な奴にこんな事をされて黙つてゐるよ
うな男は、不能者か女みたいな奴に決まつてゐる。比較的一般な分類
のオレは……いや、それはもう思春期ですから煩惱が溢れ出しちゃ
います。ハイ。別に昔から早起きは苦ではない、ここはちよつと甘
えても——。

脳裏に鬼のような幼馴染の姿が浮かんた。嗚呼、骨折するまで正

座させられるオレも脳裏に浮かんだ。もっともこれは単なるお遊びでオレの理性とか、それによって表情の変化を確かめる甘い罠ではない。だが、それに耐えられるかどうかといったら、恋仲である身、理不尽に抗えないものがある。

だが、オレの邪な感情は次の一言で吹っ飛ぶことになった。

「江口さんって横書きの表札を見ただけで振り返るエロエロ和也がほーれほーれ？」

「おまつ、全国の江口さんに謝れ！」

「ごめーんーなさい！」

うん。大変素直でよろしい。

ってか、オレもよく耐えたぞ江口さんのために、江口さんのくだりながければオレはけっこうやばかった。と、いう理由で全国の江口さんを侮辱することはオレが許さん。明日までは（残り7分で明日だったりするがな）。

とりあえずコイツはオレをからかって楽しんでるとみた。人様の部屋を荒らした挙句にベッドを占領しアルバムを広げては笑いこけてるコイツをどうにかしねえと……。別に今から朝に起きるのは苦じゃないんだが……。元より生活リズムが悪いオレだ、それがすっかりクレアにも伝染してしまい、すっかり夜鷹になっちまって……。

いや、夜鷹じゃなく夜烏レイヴンテイルの尾の頭だから夜烏か？ まあ、どっちでもいいという、以前よりも柔らかくなったし。まあ、片言の日本語しかしゃべれてなかったというのに何時の間にかスラスラと日本語を言えるようになってきた。コイツもコイツなりに努力した結果のあらわれであるのだが……。いかせん、柔らかくなった程度の問題

じゃない、オレのみならず、赤の他人にも敬った言葉遣いをしてやがったのに、ほんつと何時の間にか生意気を言うようになってきた。

まあ、オレ等らしいコミュニケーションに変わりはない。むしろこっちのが楽らくというか楽しいってのもオレもクレアもわかってるかな。アイツも素をだすし結構、可愛い所だつてある。ぜってー口に出していわねえけど。口に出したらこいつは超絶調子に乗りやがる。と、言っても不意をついて赤面するのもまた味があつていいんだがな。滅多に褒めないに限る。

しかし、こいつも段々調子に乗ってきたし……。そうだな、少しどつかで時間をつぶすべきだよな？

「ったく、コンビ二行ってくる」

しゃあない、雑誌でも適当に立ち読みして時間を潰すか。クレアが寝付いたところにオレはソファで転がってればいいか。いや、別に同じ布団で寝てもいいんだぜ？ まあ、オレもオレで思春期だし、なによりもコイツは……。下着で寝る癖があつて……。最近は欲求不満なこともあり耐えられるかどうかの問題である。

く、糞。間接的に認めてやるさ。オレは、エロエロだよ……！

オレは身を翻ひるがえし、部屋を出ようと手をかけた時に、

「和也、プリンも頼む」

女王様からの命令にオレは笑顔で振り返り了解してやった。あの野郎……肝が座ってるじゃねえか……。この億戦錬磨とまで話がでっち上げられてるが、そこいらの連中にゃ負ける気はしねえけど……

この区域というか、オレ等が今を生きる都市…… つつても30年くらい前に出来た真新しい県、『鳥栖深県』とすみけんじゃ敵なしという自信もあるぞオレは？

そんなオレは怒りを抑えつつ扉を閉めた。喉にはスナック菓子を食べた後にプリンなんて食ったら太るぞではあるが、それを発した瞬間、オレは布団についた瞬間にどんな苦痛を味わうか。そう考えると身震いがしてならない。つまるところ、常勝無敗と謂われているオレは、心を許したものに対するじゃれ合いは極力弱者なのである。それでも、先ほど言ったように普通の喧嘩ではそんじょそこの連中に遅れをとらないし、クレアにだって、ひとつの拳を浴びせる間もなく倒す余裕はある。

まあ、決して素行の良いとは決していえない中学時代を喧嘩に明け暮れては、県の高校生はもちろん、大学生、族、極道を徹底的にぶちのめしては大した自信にはなっていない。オレが自信にもつのは昔から、習ってる武術が担っている。同じ時期に、それよりも前に習ってる者にも勝ってる自信もある。故あって、オレは自分が強いという自信という驕りがあり、当初はそれを鼻にかけては波来る敵を払い続けていた。

その……まあ、高校生になってからは大人しくなってるつもりだ。他の中学や高校とかに殴りこみとかに行つてないし。むしろ喧嘩を売られる側で買う側なだけである。高校に入ってから適当に授業を聞いてはいるもののノートだけはしつくりと書いてるから成績は実はそれなりによかったりしている。記憶力とかにはオレも自信は持つてるんで先公の話とかから出題される問題も、聞き流してる割には出来てる。自分でいうのもなんだが、天才——とまではいわねえけど秀才であると自負していたりする。

まあ、そんな端から聞けば天才に思えるようかもしれないけどオレが通ってる私立高校——『聖涼大学付属高等学校』は鳥栖深の5つに分かれる市の中心にある都市——つまりは県庁所在地である『総部律市』のド真ん中であって、中々世界的にも有名な学校である。

そもそも、鳥栖深とは国として『ルナテリクスト・クオーツ』とかいう奴が『神徒計画』を用いた実験用の国であった。

最近と、いつでも半世紀ほど前になるくらい昔になって発見された、人でもない、見たことすらない動物の骨格などが次々と発見されるようになった。さも、それまでに発見されなかった事がおかしいように。その化石化した骨を復元させていくと、神話などかに出てくるとある神様と類似していたとか。そこで化石に残ってる遺伝子を取り出して胎児に埋め込むという実験をルナテリクスが所長とし、実験したところ、その産まれた少女は人ではありえない力を使えるようになったとか。

しかし、“特殊”は“人”には認められず、虐めを苦に少女は自殺した。その実験した少女はルナテリクスの実子であり、待望の第一児であったのは余談である。そしてその次の日を境に、男は島を権力と金で買い、国を立ち上げたと聞く。

人が自分の持てないものを持つ者を恐れるのは当然のこと。そして、少女の死を苦に作り上げたのが、この島そして一つの国である『樂園』という国であった。

樂園というふざけたネーミング。しかし神々の遺伝子を組み込まれた子供たちには皮肉をこめた、だがある種の真実である国名なのだ。そもそも国とは『国民』、『領土』、『主権』があれば誰でも

つくれるような物で……。あー、いや『マルタ騎士団国』は違うよな、ロードス島および、マルタ島における旧来の領土を喪失してるから、国土を有していないはずだし。

だけど、国際連合にオブザーバーとして参加する主権実体でもあったような気がする。たあしか、ビルかなんかあつて実質そこが大使館だかなんだかで——えーっと、まあ、ビルが一応領土みたいなものらしいが詳しいことはよくしらん。

まあ、そのルナテリクス・クォーツは頭が狂った男であるという事は認識できる。ルナテリクスが提唱する『神徒計画』は神の徒として狂い始めた世界の秩序を正すと……人としてどうかしてる考えである。中二に毒されてるに間違いはない。

『狂った世界』……。か。漫画や、アニメなどの世界じゃないんだ。現実をもっと楽でも辛くもある。そんな妄言など信じる奴は当然じゃないと思われたが……賛同者はいた。卵と精子で受精すると同時に、『特殊な技術』で化石から取り出した遺伝子を入れる事により産まれた、全ての子供たちが神でも人でもない侮蔑の言葉として『GH』ゴットハーフと呼ばれる。

鳥栖深はそんな狂った国を、世界的に超有名つというか、世界で知らない者はいないんじゃないかねえかというほど有名で、世界のトップにたつ『古都宮財閥』により買収されたのだ。かの古都宮総一郎は化石の発掘や、化石に含まれる遺伝子の中でも特殊な遺伝子を取り出す実験には高額のコストが必要となるところを突き、日本への統合をさせた。その裏ではなにかしらのいざこざがあつたに違いないが……日本史の教科書に書かれてるのはそんな薄っぺらい内容だ。

……日本史のテストに出るからじっくり記憶をしとかないとな。

うんうん。

日本としては間近にあるその国が恐ろしかったのもあるのだろう、当然といえば当然だ。自国の近くにそんな危なっかしい国があつてはのうのうとはしていられない、だから古都宮という手段を持ち要り手籠めにさせたんだろうな。平和主義を担げてる国な分に物騒なことはないと思うが……まあ、いいだろう。

それから都市化が進み、県となり。古都宮の支援を受けた進学校が出来た。中でも有名なのが……やつと本題の『聖涼大学付属高等学校』である。まあ、どの学校もなんだが、古都宮の支援による最新の設備や教育環境が噂に噂を呼び日本全国から生徒があつまるようになった。それが、あらましである。

故に本物の天才なども集まり……このオレが秀才に落ち着いたのだ。いや、実際は中学時代のやんちゃや尾ひれのついた噂などがあり秀才という認識はされず……不良のレッテル全開なのではあるがテスト前のヤマが書いたノートを適当にサラサラ読み流す程度のオレが、である。ちよつと失礼なんじゃねえのか？

まあ、実際はそんなことはどうでもいいんだ実際は。賢いねえなんて言われるのもなんか歯が浮くし自分でも自分をそれなりにわかつてるから真面目に勉強していい成績をとっている奴らに申し訳がたたないってのもあるが、性にあわんねえってのが一番だ。

自分は賢いんだとか鼻にかける奴も気に入らないし、本当になにも勉強しないでいい点とつて平然な……当然だつて面する奴も当然きにくわねえ。オレも頑張りは適当とかだつてのは認めるが、ちゃんとためにノートはとってるし黒板にかかれたのじゃなくて自分で工夫もこなしてノートに書き綴つてもいる。むしろ板書されたのを

自己流の解釈で書くのは大事なことだ。

まあ、努力の仕方は人それぞれでしかないわけで……。自己正当化とかする気はサラサラない。

「んあ？」

気がつけばすでに目的のコンビニの前であつた。そのコンビニの影には明らかに不良です！と、自己主張したような金髪や茶髪やらのピアスだらけの集団。どうやら喧嘩で大敗したらしい。

うむう、つまない当たり前のことでも考えながら歩いてりや結構すぐに場所につくもんだ。オレはドアをくぐり顔見知りの女店員が「いらしゃいま……」でオレをみて硬直したところ軽く傷つくがもう馴れた。顔見知りというかこ時間によく来るから覚えてるだけなんだが。

しかし、盗んでもいねえのにこの前、ババア店員がさもギツタかのように声をかけて来ることもあつたなあ。正直オレという人間は先入観にいろいろ邪魔されてる奴でもある。と、……無駄にも心の中でつぶやいておく。

店内を適当に見渡すと視界の端っこに赤いなにかが入った。オレはその視界に入ったも奴に近づき肩を叩くと、そいつは振り返る。クレアよりも長く膝丈まである赤い髪の長髪の男だ。顔の造型もとのつており凜とした顔立ちでもあるこの男は友人——っていうか友人でもないのに気兼ねなく話せるという微妙な存在である——如月駿ラキコンである。同中出身で同じくやんちゃだった頃の知り合いだ。如月は軽いため息を——って、失礼なやつめ。

「勤務中だ。邪魔をするな」

「へーいへい」

まあ、互いに友好関係などとはそれほど思っていない分につつ放した態度をとることが多い。オレは少しオーバーに肩をすくめて見せる。コイツにこんなフレンドリーに接するのもバイトは校則違反だからってのが大きい。理由はいろいろあるが、オレが通う、そして如月も通う聖涼はバイトが校則で禁止されてるためこういった茶化したやり方をする人が多い。さつさと陳列作業に戻った如月を横目にプリンがあるかどうかを確認して、オレは雑誌コーナーでバイク雑誌などを見て過ごすことにした。

個人的に中学時代のやんちゃしてた頃にバイクは乗り回してた（もちろん無免許で）んだが……。まあ、個人の趣味としては構わなものだろ？ 旧式なだけあってピストン運動もわりいからパーツをかえるしかないし、いちいちめんどくさいものがある。盗難車なんだし修理にだすわけにもいかない。正しく言うとな戦利品なんだが、現実問題は盗難車扱いなのだろう。

と、いうのも昔の話なのだが、免許をちゃんと取得したオレはちゃんと自分の愛車だつて持っている。それは後で長々と語ろう。別にオタクが入ってるわけではないが、結構、新車に値するのでオレも思いいれがあるためでもあつたりする。実際はそんなもんだ、核心に触れる話題なんかにはついていけないものもついていけない。

オレはパラパラッと流し読みをする。まあ時間も時間だし1時間半ぐらいは潰したら確実であろう。オレはクレアに対して淡い恋人の幻想を抱きながら適当に時間を過ごした。オレだつて……そりゃ男だし仕方ない。

そんな、かないっこない幻想を抱いていると携帯の着信音が鳴る。ポケットから取り出して開くとクレアからのメールだった。メールを開くと飾りもなんもなく、ただ本文に『寝る』とだけ二文字で送られてきた。お姫様はどうやらご立腹らしい。オレは返信もせず後ろ髪を搔きながら会計を済ますためにプリンが売ってる棚に向かうが――

プリンが根こそぎなかった。

「……………」

オレ、硬直。

ない！ない！何故プリンだけ綺麗に根こそぎない！なんだ、確か如月に挨拶した時にチラツと視界に入ったがあつたはずだ。い、いったい何故……？ いや、当然買われたからだけど。ありえるのか？ いや、こんな深夜の時間に普通ありえねえんじゃねえのか！？

くそっ、店員に聞こうにも前に一度経験したことにより強盗と間違われ警察が来るかもしれねえし……ってか、どんだけ肩身が狭いんだよ！？ オレって！ ええい、しゃあねえか……少し放れてるが別の店で買うつきゃねえよな。それでもなかったらプリンの材料だけ買って作ってやるしかねえよな。

オレは適当にガムをとりレジへと向かう。さすがに何も買わないのは気が引けるし、知り合いのバイト先だ。これぐらい買っても損はないだろう。手に取った何時も常備しているキシリトールガムをレジを通す。

対応したのは如月で、つり銭が出ない程度に金を渡してレシート

などを受け取らずガムだけ持ってレジを後にする。無造作にガムを上着のポケットに仕舞いつて外にでる。すると、結構自分でもわかるほど怖い顔をしていたためか、外のゴミ箱を整理していた店員の動きが固まったのは言うまでもなかった。とほほ……。

それがまた逆に傷つくものがあるが、もう慣れっこだ。中学時代の行いを振り返ると少年院から出られなかったかもしれない。つってもオレは捕まることもなくやり過ぎていった。それもこれも、親代わりになってくれた柴原^{シバハラ}の叔父さんと叔母さんのお陰であって、オレはどんなに恩返しをしても返せきれないであろう。

両親が事故に逢い、オレが今住んでる家——元は祖父の家なんだが気づけば家にはオレ一人になっていた。身よりもあまりなく、北海道にいる祖父の親友に引き取られるという話になったがオレ自身はその頃にはだいぶ荒れていたために結局、有耶無耶になってしまいい近所の女の子の両親に世話になっていたというわけだ。

今、思えば窃盗とか暴行とか悪行に悪行を重ねてたな……。

……いやあ、最近はやつと涼しくなってきたな。

誰だ現実逃避なんてテロップ担げた奴は？ 泣いてなんかねえよ！ くそ！ ただアレを見上げてただけだ！ 最近になって突発した異常現象の奴だよ！ って、オレは誰に文句をぶちまけてるんだよ。ここまで自分を振り返ってみたのは久しぶりかもしれない。

怠惰にすごして来た夏休み。特に出かけることもなくクレアとダラダラしてた反動もあるし、明日から始業式で学校が始まるという憂鬱な気持ちとかがここまで学校のこととか住んでる街の事とかどうでもいいことを再確認してしまった。

特に何事もない、夏休みだったんだけどなあ……。

8月中旬——夏の暑さも次第に落ち着く中で、最近ニュースで注目されていることがある。ネオンの灯りに照らされる街中。そのネオンとは別の“明かり”——つまりは月と星の明かりである。その中の星が、夜空を普段から空を見る事のないオレでも明らかに異常だとわかるほどに増えている。それが、今の世界中で起きて且つ、最も多くの星が鳥栖深を彩っているというのが最近の調べで分かったらしい。世界中から注目を浴びてさまざまな研究者が来日しているらしい。

立ち止まる。天の川、それにも勝っているのではないかと思うほどの明かりが夜空に煌煌と輝いている。その星々は日中ですらその存在を見せており。青い空を灰色がかったものが塗りつぶしている。一面の天の川、むしろ天の海という下らない洒落にもなっているこの空。考えてみれば不気味で仕方ない。

それが月のように日中で確認できる太陽圏外からの存在。たしかに星の存在は数多あるのだが、ここまでハッキリと存在するのは……どうも訝しい。更にはお偉いさん曰く、地球に近づいているとか、天体望遠鏡で探してもその星々を発見できないでいるというオカルト的現象が多々ニュースで放送されている。

……危機感をもつ者は多い。当然も当然だ。

だけど物事には、本質が重大であれば重大であるこそ一般市民にはどうの仕様もなく、その本質の中心に居る奴等が解決しなければいけない。やる時にやらなければ、やる意味はないのだ。そんな高説ぶるようなことは性にはあわねえんだけど、物事が重大であるか

らこそ、オレにはほとんど無関係な話にもなるし、オレなんかではどうすることもかなわない。

故あってオレは、毎日の食事のメニューやゴミ出しの日の確認を、ペットボトルのラベルを剥がしては水で切ってゴミ箱に捨てるなどといった日常で出来る最低限行動と、そういった悩みしか抱えずに生活している。

とりあえず、所詮は一人の人間にしか至らないオレは、どうにもできない現象を客観的にしかなれないでいた。オレは物語の主人公とかそんなじゃないんだ、こういう明らかに世界の危機ー！って問題にどう着手することも出来ないし、する理由だってない。出来たとしても、一体どうすればいいのかだってわからない。わからないからこそ、オレはこの起きている問題にはどうしても無関心になっている。

いや、この日常であるため無関心でいるべきなのだ。守りたいものがある、守りたい日常がある。だから、日々の問題を適当に解消しながら過ごすこの日常は好きであつた。いや、単にクレアという日常が楽しいだけなのかもしれない。自分にも本心を誤魔化すオレが……自分で自分のことをわかるはずもないか……。

もし、自分が騒ぎの中心に立つようなら。オレは全てを投げ売り世界を敵にしても守ろうと誓う。

大切なモノを。それが何かだなんて今更わからない。だけど、大切なのはいざというときに信念を立てていれば少なくとも目の前が真っ白になって次をどうしたらいいかわからなくなるとか、そんな事はない。それが祖父がオレに執拗に言い残した言葉のひとつでもある。信念を立てれば、迷う必要はないのだと。オレ自身、中学の

時に荒れていた自分を顧みて思う。

ボーっとそんな事を考えて家にある防災グッズがどんなものか思い出しながらオレは歩を進めていて、公園に差し掛かった。“その声”を聞き取ってから正気に戻る。結局、自分が物事を中心に巻き込まれるときは何もかもが遅くて、その天災に見舞われてる時だとこんな平々凡々な暮らしをしているオレがそんな物事に巻き込まれるかと聞かれたらそれはまずありえないじゃないか。鼻で笑ってしまつ、結局は強がりと言つても、出来ることは最低限、命を守るにとくらいじゃないかと。

そついや、声が聞こえたのは――？

「――つう、“セカイ”が、近づいてる？」

スーパーへの近道である公園。ブランコ。金髪。黒いロープ。少女。少し異彩を放つ怪しい少女が居た。染めたとかそういうのではなくクレアと同じであろう天然ものの金髪だ。しかし日本の気候とアイロン焼けしたクレアの金髪とは違って（アイツなりに気を使っているのは知ってるが夜鷹になつてりや、そりゃ髪も荒れる。）昔のクレアのような澄んだ金髪であり、中学時代のまだ片言の日本語を喋っていた時代を少し思い出した。必死に言葉を伝えようと子犬のようににはしゃぎながら舌を回す、結局なんだかんだあつて素行の悪かったオレに付いてきた阿呆の顔が鮮明に蘇った。

だから――？　どこか、幼さを残す顔で、歳相応とはいえぬ悲しい表情をしながら、夜空を見上げながら呟いたのをオレは聞き取ることができた。まあ、意識もしていたし当然だ。どこかでクレアに似せていた、だから届かないような声も届く。惚気た話ではあるが、それは真理。

その言葉に大した疑問を感じた訳でもない。少なくとも、戯言と聞き捨てるような表情では無かったのは見て取れる。なによりも、それが誰なのか分かっていた。だからオレはゆっくりと振り向き、声をかける。

「星の数は死んだ人の数らしい。近づいてるのは幽霊オバケかもな？」

「雨宮くん？ 夜更かしは駄目だよ？ 主にお肌とか髪に」

その言葉、クレアに言ってやったらどうだ？ 当分晩飯前には寝るかもしれないぞ？ そうやって、内心で思い描く同居人の行動を思い浮かべるといついっさい笑いが込み上げる。

コイツは——最近よくここで見る奴で以前、何故か猫を頭の上につけてたのを涙目で走り回っていたが、よほど猫が頭の上を気に入ったのだろう、頭からどく気配も泣きわめくコイツが、人々の憩いの場所でもある公園でひじょーに、五月蠅かったんで助けた（いや、助けたという内に入るのか……？）奴だ。

そこから少しだけ交流をしたことのある、クラスメイトである。名前は、レナ・フォード・ライズ・ハールド。聞いての通り外国人である。国籍とかはどうも誤魔化されてる気がするが、どうでもいい些細な問題だ。語りたくないことだつてあるだろう。オレは先ほどに知られたくない過去を赤裸々に晒されたので少しカマをかけてみようが考えたがやめておく。そこまで関わる必要性なんかはねえじゃん。馬鹿かオレは？

まあ、とりあえず親の仕事の都合でこっちに越してきたとかのことである。明らかに怪しいが特に気にする必要も関わる道理はオレにはないはずだ。調べるとしてもこいつの事情に巻き込まれるだけ

で、隠そうとしている秘密を知っても得は存在しない。それにあくまでもオレの直感でしかない、流暢にしゃべれる日本語に対して英語はオレと同じで赤点補修組だったはずだ、それに今まで住んでいた国の言葉をしゃべってという話題を偶然、耳を掠めたのだが、親の事情で次々と生活拠点を変えていたために母親の祖国である日本の言葉しか上手く話せないと聞いた。

怪しさと、厄介ごとの塊のようにしか聞こえない。関わらないのが絶対的に吉である。

と、言ってもクラスメイトで少しは交流のある人物だ素通りしても別に構わないが、挨拶するだけして直ぐにスパーかコンビ二に向かおう。最低限でもそれはマナーとして俺はクラスメイトの女子に話しかけた。

入学してから、少し不思議な雰囲気はあったものの持ち前の可愛さ（動物的な）によりすぐさまクラスに溶け込んでる奴だ。故に、歴戦の記録や尾ひれはひれのついた話や伝説じょうの怪物でありクラスに馴染めないで居るオレですら名前がさつと出るほどよく話題にあがる人物だ。

男女から妬まれる事も無く人望も厚い、この小柄な金髪転校生は悪い魔法使いでみんなに魔法をかけて操ってるのではないか？ そんな眉唾ものの冗談を考える。この黒いローブで変な呪文を唱えながら、さもそれらしい不気味な色のフラスコに入った液体をガスバーナーで温めるのは酷く不釣り合いであった。

「なにか、失礼なこと考えてなかった？」
「いいや、別に」

エスパーかコイツ。黒ローブとか怪しい格好してるからもしくは
とは思ったが。それよりも、魔女とかではなくてもっとイメージの
出来るものがあつた、魔法少女だと思い、つついこんな世の中に
化け物退治をこんな格好でしている異常さに笑いが込み上げてきた
が平常心を装う。しかし、魔法少女にしても華がない、この何とい
うか闇に紛れるためにあるような体全体を覆うようなローブ、そう
だな……魔法少女や魔女というよりコイツは――

「雨宮くん？ 突然黙ってどうしたの？」

「あ、いや……少し考え事だ。つーか、お前は、“また”、下宿先
から逃げ出して来たのかよ？」

「ううー！ だって、マコにいったら今度境内の掃除をサボった
らプリンは一ヶ月駄目だって言うんだもん！ 我々には団体交渉権
があるのだよ、ワトソース君」

ホームズを一から見て勉強しなおして来い。それよか全国の探偵
の片腕に謝るがいい、むしろそうするべきである。っていうか何処
からソースが来た。ウスターソースじゃあるまい。ついでに言うと、
お前がしているのは団体行動権だ。っていうか、お前は個人じゃな
いかよ。いいか？ 団体交渉権ってのは端折ると労働三権の中の1
つで労働組合が賃金その他もろもろ労働条件について交渉すること
だ。

確かに片思いな交渉であるが、コイツがしてるのはストライキ。
つまり団体行動権だ……。でも、ストライキってのは認められた状
態で仕事にでない事を指すからあ……一種のサボタージュか？ ゆ
ったり仕事をするというかサボってる時点でもうストライキ確定だ
な。

「^{シンドウ}神堂さんを怒らせるくらいなら従ってたのが楽だろ」

「は、反抗期には仕方ないんだよ！」

自分で反抗期というか。小娘め。

神堂さんは……まあ、オレも少しお世話になつてる神社の神主（？）だ。そしてなまら強い。とにかく強い。やたらめつたらに強い。出鱈目に強い。むしろ彼に喧嘩を売るような人物は存在しないであろう。その絶対的な強さで喧嘩を売られることはないとか。正直、羨ましい。

神主つてことで（恐らく）恋人である、ミス鳥栖深を中学生から独占し且、未だに不動であるという恐ろしい現象をもつ……いや、確かにあの人をみりやそこいらの美女なんて美女とは思えなくなるほど価値観は下がるところか、非常に高いハードルに上がってしまったんだが、その人を射止めるというんでもない幸せ者（なのか？）であり、竹箒一本で、街の不良から恐れられてる。オレをガキで遊ぶかのようにいなされたのは苦い思い出だ。その日以来からオレの上下関係は決まってしまうてるわけだ。情けないことに。

因みにクレアあたりのとこで言った地域に敵なしつてのは——見栄を張った。謝る。全国の江口さんに。

だからこそ言える。あの人を怒らせるのは自殺行為だと。いや、むしろあのカップルの間に入るなんて無茶な話でもあるんだがな。自殺行為すぎるというか、その空間に耐えるのか非常に問題があるかもしれない。カップルつてのうは知らず知らずの内に赤面してしまいそうな空気を出すというし、ある意味こいつも被害者——

「プリンにはマコにいに立ち向かう程の価値はあるんだよ」

では、なかったようだ。

少し頬を膨らまして可愛らしくいつてるつもりだろうが、可愛い——じゃない、何気に命よりもプリンが大事だと言うか。オレからしたら正気を疑う発言だぞ？ クレアといいレナといい、どうしてこつも女は甘いものに目がないのかねえ？

別に苦手ってわけじゃねえが甘いものをあんまし好んで食べないオレにはわかりにくい次元だ。そのくせカレーになると辛口を好むパターンはクレアや魅夜^{ミヨ}でわかつてるが——。

なんとなくだが、コイツ……ぜってえ辛れえの無理だよな。甘党だ、それも血糖値で死んでしまいそうなほどの。

「理不尽だな」

主にそんな事で喧嘩になつてしまふ神堂さんが。

「そつだよ、世の中は不条理な事でも、何かの意思で理不尽でも立ち向かうことになるんだよ」

途端に、表情が曇る。

オレは言い返す言葉も無く呆け、視線を反らす。自分の意思で立ち向かうのではなく、何かの意志で理不尽でも立ち向かうことが必要という言葉の意味をいつい汲み取ってしまう。そんなのは、どれだけ人生を達観した人が吐ける台詞なのだろうか？

コイツはどんな人生を歩んできたのか。国籍を何となくだけど、誤魔化された気がした——そんな違和感を覚えてたオレはレナ・フ

オード・ライズ・ハールドの人生が気になってしまふ。単なる興味、そしてどこか惹かれる彼女の容姿に、オレはいろんな感情が芽生えてきた。

いままで、特に会話をしなかったクラスメイト。さも旧知の仲のような会話をできる、こいつの世界――。

それは、どんな世界を見てきた、こいつの世界なのか。

気になって隣を見るといいない。見上げると、いつの間にかレナはブランコの真上に座っていた。鎖をつるしている場所にどうやってよじ登ったのか気になりはしたが、この不思議ちゃんだ。一々気にしては何もいえない。危ないとかいう以前に黒いローブが、人間離れしたような金髪が、妖艶に、怪しく――月明かりに照らされ幻想的に思えた。ブ

ランコの鎖を吊るす場所に座り、どこか微笑んでいるようであった。その微笑みは嬉しさか、楽しさか、はたまた悲しさか。オレがその真意を知る由はなかった。

「やる時にやらなきゃ意味はねえよ」

「……その言葉、好きなの？」

好き？　そういうのはよくわからない。ただ、唯一いえる事はあるんじゃないか？　悲観しかできないようなコイツに今、言わないで何時、言えばいいんだ？　ようは、そういう事。オレがアイツに言ったんじゃない。オレがオレに言った言葉でしかない。でも、何かに行動を移すとき、この言葉は一種のオレの魔法の言葉だった。

だから、何かを決断し、動くときにオレが用いてる言葉。

「何かの意思、それが『運命』だとしても言うならくだらねえな」

猫のような大きな瞳が、オレを見ているのがわかる。

「くだらない？ 雨宮くんの綺麗事の方がくだらないんじゃないかな？」

「茶化すなよ。けっこー傷つくし、くさい事を言った自覚もあんだから」

警鐘が鳴り響き。これ以上は関わるなど、自制しろと自分の頭が頑なにオレに言い聞かせるが、オレはオレなりの信念だつてある。それが相容れなくても自分の主張はハッキリとしてあるべきなんだ。それを押し付ける気もない、だからこれは「お前とは違うからこれ以上は自分を巻き込むな」という拒絶の言葉になる。

「結局さ」

それを切り出そうとしたときにレナがそれを遮った。何が言いたいのか正直わからないし、拒絶する言葉を言うタイミングを失ったオレはどうすることもなく次の言葉を待った。

冗談だよ。という、はにかんだ言葉か。だとしたら、それ以上に助かることはないし、何よりも今のコイツの憂いをもってる顔に何を言えばいいのかハッキリとしない。ハッキリしないというのは正しくない、タイミングではない？ それも……何かが違う。そんな曖昧な疑問に問答を繰り返してしまった。だから、それは自然とレナの言葉を待ってしまったのかもしれない。

「これから起こることで、みんな変わっちゃうんだよ」

「……………」

どういう事か理解できなかった。レナの目線の先——それはいつの間にか綺羅星に向けられていた。なにか知っている。そういう確信ができた。なんで、頭がおかしい奴とか思う事はなかったのか？それは多分、この場の雰囲気がそうさせたんだと思う。明日になれば笑い話にできる。そう思っていれば……この変なまわりつく感じを消せるんじゃないか？

そう、願えばよかったのかもしれない。

それを打ち砕くような事があっても。きっと——願えば。

『ア、アアアア！』

「っ！？」

今夜。綺羅星の下で——…。

「誰も、救えやしないんだよ」

そう、願っていたのなら。

* * * 数分前 青雲市 SAID 朝倉時人

誰も『不幸』な事は幾重に経験する。

それが、俺は人よりも多いだけ。俺という人間は不幸という姫君に愛されてるらしい。しかし、朝倉時人^{アサクラトキヒト}、不幸に愛されることはあ

つても、姫君に愛されるような事はない。

……自分で言うておいて虚しくてたまらない。

「いてててっ…」

あー、くそ。まだ殴られたところがヒリヒリする。余計に虚しくなってきたし……はあ。

本当にこんな時間に買出しなんかに行くものじゃないな。無灯火の自転車にぶつかったり、イヌの糞を踏んでしまったり、近道をしたら野良猫の尻尾を踏んでしまい、それが“不幸”にも子供を産んだばかりで子供を守ろうとしてか、強く顔をひつかかれたり。そして何時もならあるのに、こういつた時に限ってコンビ二には売ってなく、駐輪場の自転車を倒して、そういう職業の方々の車に傷をつけては追われたり、なんとか逃げ切ったのはいいけど隠れた路地にちよつとヤバイ感じの薬をやっていたりする、明らかに日本人じゃないだろって人に出会って、再び鬼ごっこしたり、まあ、結局はコンビ二を3軒も回ったり、途中一軒では何かを盗んだと勘違いされ捕まったりして……。そして、さっきは不良に絡まれてしまったりして、この有様である。

別にそんなにたいした連中ではなかったのだが、野良猫に引っ掻かれた傷のお陰で余計に殴られた場所がヒリヒリして仕方ない。まあ、今日はこれでも運のいい方か……。いつもならこの倍は不運な目に合ってることだしな。

多分、今日は綺麗な満月だからかな？

関係はないんだろうけど、そういう事にしておこう。雲がなく綺麗

麗な満月がこちらを覗いてくる。そしてあいも変わらずに尋常じゃない“星”の数。

「……『ゴーストプラネット』かあ」

数週間前から、夜空の星の数が増えている。それは観測することが出来なくそう呼ばれてる。『存在しない星』、まあ学者ではいろいろな説があつて連日ニュースで騒がれたりとか、そして『神徒計画』の第二段階とまで言われていたりもする。難しいことはよくわからない。とりあえず、なんか大変そうである。

それで好奇心が無駄に旺盛な妹がはしゃいでたり新聞部であつてなんか浮世離れた論説を発表しては学生を楽しませていたりする。だが、新岳先生に無駄に騒ぎ立てるなと釘を刺されたんだっけ？
そういう愚痴をしていた気がする。そりゃ、あんなだけ騒げば生活指導に釘を刺されるのは目に見えてるだろうに……。真希まきもちゃんと俺が言っていたというのにきく耳をもたないからこうなるんだよ。

兄として、言う事の聞かない妹の今後を疑ってしまう。父親が仕事で海外に飛び、親父を愛してやまない母親がそれを追って、祖母に育てられた俺と妹——真希は少なからず、真希の我儘をなんでも親の代わりと聞いてやった俺や祖父母に対してコンプレックス——まあ、ブラコンな節はあるが、それに至っては俺が悪く、祖父母の当然のお叱りも、俺が、この『不幸』を利用しては怒られるという行為を繰り返しているためか、真希は俺が何時でも何とかしてくれると思ひ込んでらしく、我儘し放題なものも反省する点だ。

そんなこの先が思いやられる、小さな溜息を吐き捨てポケットを漁る——が、目的の物は見つからない。

服のいたるポケットを調べるが、鍵がない。そこで、俺の焦りは次第に表面にあふれ出てくる。

……。家の鍵を落とした!?

「う、うそっ?」

確かにズボンのポケットにいれてたよな……? ちゃんと確認もしてたし。えっと最後に確認したのがたしか……コンビニに入る直前で……。

そうふり返していると指先に違和感を覚える。大きさからいったら500円玉くらいであろうか? ……まさかぁ……? こっから落ちたら流石に気がつくって。ん、そういえば肩のぶつかって殴られた時に受身がとれないで倒れちゃったけど……まさかあの時か?

うーん、流石にそれはないんじゃないか……? ……そうともいえないのが、俺の『体質』なんだよな。むしろそう考えた方が自然なんだろう。いい加減ためいきも漏れない。この程度の不幸が俺には日常茶飯事であるからだ。後ろ髪を乱暴に搔いて次に携帯を探す。

「……まじ?」

あった。スライド式の4年間愛用してなんとか壊れもなくしも頑張っしてなかったスライド式の携帯を開く。画面は写ることもなく黒いままであった。電池切れである、そういえば学校に行つててマナーモードのままだったから充電切れ間近だという警告音は鳴らなかったのか……。

4年も使つててバッテリーじたいがイカレてて充電が切れるのも

普段使っていないのに早い。もう寿命であるのは間違いないのだが4年も使っていると愛着というものはある。傷も目立つのがいくつもあるからもう代え時なのだろう。

これでは、真希に連絡をいれて開けてもらうことが出来ない訳だ。やっぱし、鍵を探すしかないか……災難だ。慣れたとはいえ気が重たいのは事実。どうしようもないことだから、余計に気が重たくなる。チャイムを鳴らすという手も考えたが祖父とかにバレたらしばらく外出が禁止されてしまう。そもそも真希にすら猛反対されるのが無理を言っただけで外出したんだ。

「独り言ばっかで馬鹿みてえ……」

そんな独り言を言ってみる。滑稽だ滑稽すぎるぞ？

まあ、鍵を落としてしまう方が余計に滑稽だよな。探しに行かないといけないしうだうだ言うのももうやめておくか。今日はもうちょつと不幸を覚悟したほうがよさそうだ。

家族分のプリンが入った買い物袋を引っさげて俺は来た道に戻る。うとする。わざわざ総務課まで戻るのは大変だ。別にそんな遠いという訳ではないが夏場、歩くのは辛いものがある。今でもシャツが背中に引っ付いて気持ち悪い。せつかくの陳列ケースで冷えていたプリンもいまでは生ぬるくすこし残念だ。早々に冷蔵庫にいれて置きたいがこれでは仕方ない。

だから、俺は鍵を探すために戻ったんだ——…。

そうして、近道のための高台公園に向かおうと何の気なしに路地を歩いて居るときに横から激しいライトに照らされて目を細め、腕

で覆い振り向く。一瞬だけ思考がとぶ、ライトがついてるなら丁字路で気づかぬ筈はない真横から接近してきたトラックに動くはずの足も動かず、立ち尽くしてしまう。どういった経緯でこうなったのか俺には理解が出来ず故に、考えてしまった。今更、間に合うものも間に合わない。

そして、轟音が低く周辺に響いた。

【0・0】TOY BOX

種族別の恋愛関係というのは、どの物語でも大抵は悲劇の対象で、どれも禁忌なのであろう。

人と人、動物と動物。

天使と天使、悪魔と悪魔。

天使と人？ 悪魔と人？

そして、死の神と人の子

許されないものなんじゃないか？ 人は人以外とのものが交われ
ば呪いに侵される。

そういうものなのだ。

古今、種族別の恋愛はどれも悲劇しか生まない。

桜並木を眺める少女、カゴが歪に曲がりたりなど古臭く、半壊し
た自転車。

その並木道に立つ俺は――、

なんで、あの泣き顔をの少女に声をかけたのだろうか？

声をかけなければよかった。声をかけなければ俺は彼女とは関係
をもたなかった。

たった一つの禁忌、それに呪われてしまうのだろうか？

そうして、まどろみの中で――俺は――。

“アイツ”に声をかけてしまう。

それは、いつも頭の中で拒絶しても。

それが、いつもの光景。

そして、代わらない夢。

そう、俺は…

「ところでどうじゃ？ わしと手を組むのなら、世界の半分をお前にやろう」

最悪の目覚めをした。

味噌汁に、焼き魚、それから焼き海苔、玉子焼き、お浸し、そして…… たくあん。

ごくありふれた日本料理が立ち並ぶ朝のテーブルに、昨日の残りである煮物もあった。俺は半眼のままエプロンを着て朝食の準備をしている髪の高い女を睨む。存在感がある清楚な黒く腰丈まである長い髪。その髪は一本一本丁寧に手入れしてるのではないかと疑うほどに毛先まで艶がある。この時代に、^{げんたい}三角巾までして、白いエプロンに身を包み朝食の支度をしている非常に時代錯誤な彼女は、俺の存在に気がついてか振り返る。

大人の女性の風格とでもいうのか？ 気品とでもいうのか？ そんなことはどうでもいい、整った容姿に肌理^{きめ}こまかな肌、それはノーメイクだというのに、血色が悪いとか外人であるとも違う、白く張りのある肌であり、日常のケアが行き届いているのだと、相変わず感服する。前巡した通り時代錯誤な格好をしているが、朝になつていきなり歳相応——とは流石に30代な人間がフリフリ——所謂レースのついたエプロンをしてきたら俺は驚く。

「真琴、おはよう」
「ああ、……。」

表行きは完璧なのに性格が30を過ぎても子供っぽく、ジト目でこちらを睨んで来るのが彼女、タカナツカナデ嵩波奏である。この『嵩波神社』の後継人であり、現在の家主でもある。気立てもよけりや料理だって美味い、あまつさえは絶世の美女として、街で有名である。高校時代に交流がありなんだかんでこうしている間柄なのではあるが、おそらくはこの街の学生や社会人のほとんどの（特に男性）の憧れの存在であるのはよく知っている。

だがそんな今は死滅している大和撫子の生き残りでも、中身は野獣（ここ重要）。俺はその奏とは学生時代からの友人であるからして、その凶暴さはこの身を持って体験している。経験じゃないってあたりもう年季以上の物を感じてしまうのには理由がある。一度、いや三度ほど通学用の自転車を破壊された経験をもつ身からすれば、凶悪そのものだ。そんな関係が学生の間続き、度々連絡はし合っていたが2年ほど前から居候としてこの神社に身を寄せている。

もちろんタダでという訳にはいかないから、蔵や境内。いたるところの掃除や神事の手伝いをしている。実質、この神社の宮司だとか神主だとかすき放題、呼ばれてたりもするわけだ。まあ、勘違いされてもしかたないという理由はある。高校の時代のある日を境に街から姿を消した俺であったが、諸事情により帰ってくる必要ができた。そこで下宿先として、最終的な相談相手が奏であり、成り行きでそうなった。つまりは俺と奏の関係を誤解してる人が多いというところでもある。

まあ宿泊代の代わりに神社のバイトとして働いているが、俺は俺

の仕事優先させてるため本格的に手伝うのは晦日や正月程度だ。だが、奏目当てで参拜にくる輩もいるので、たまには行かなければ――こちらの事情も少々成り立たない。せめて後1年はこの暮らしを続けてないといけない。全てとは言わないが事情の大半を呑んでくれた奏の好意に甘える形で俺はここにいる。

……。

「どうしたの？」

「いや、朝の不愉快な式神のせいで興が削がれただけだ」

「あ、あれはー、そのー」

煮え切らない態度。どうやらあの式神を仕向けたのは隠したい何かがあるらしい。記憶しているカレンダーを思い返す、いや感覚は辞書を引いてるような感覚。頭の中の記憶と照らし合わせる。するとそれはすぐに見つかった。

（なるほどな。）

聞こえない程度の小声で呟く。そういえばそろそろそんな時期でもあったか。10年ほど離れていて去年と一昨年も手伝いに駆り出されたがやはり身にしてみて居ないようだ。おそらくは町内会の連中とひとつ口論してきたと見受ける。多少苛立ってた形跡はところどころ見受けられた。

「お前と関わると本当にろくでもないことになる」

「生活力が欠如してる阿呆のどの口が言うのかなー？」

「やめろ、頬を引っ張るな」

「なんで引っ張ってるのに普通に喋れるのよ！」

「訓練の賜ほのだ」

……。

「……」

「……」

数瞬の沈黙。

「は、ははは」

「……ふ、くくく」

ひとしきりバカの大笑いを聴きながら、俺も小さく笑みをつくる。これではレナに仲を勘違いされても仕方ないのはわかる。数年の共同生活で喧騒はあっても愉快的な事は殆どなかったようなものだ。お互いに溜まっていた鬱憤があつたのだろう。

できればこれで機嫌が治ってもらいたいものだ。

俺は小さくため息を吐き捨てる。普段からあまり笑うことを得意としないためか少し疲れてしまった。朝っぱらからガラではないことをして疲れてしまったのかもしれない。だが、連日の緊張状態から来る疲れよりは快楽にほど近い疲れだ。そう、学生時代も3人でこんな感じだったな……。

「朝ご飯用意するから座ってて」

「ああ、……。」

目尻に溜まった涙を拭い、鍋の下に去っていった奏を目で追いながら、茶の間のいつもの定位置に腰を下ろす。座布団の感覚が心地よい。

胡坐をかきながら俺は黙考する。昨晚にレナを叱り、今まで帰って来た様子はなく多少心配になったのだ。学校の勉強道具はまだ部屋に残ったままなのだろう。レナも俺もここに居候してる身だ、少しはわきまえるべきだと、少しきつく言うべきであろうか？

……いや、『今度境内の掃除をサボったらプリンは一ヶ月は食わせない』としか言っていないが……。いや、レナにとってプリンを抜くというのは悲劇どころか、どんな刑罰よりも重い罰則なのである。そういうところだけは融通が利かないのは知っていたつもりだったが……。捜さないといけないか、流石に。

だいたいの検討はつく、昔からアイツは公園にいたことが多かった。もよりアイツはあそこでも肩身の狭い思いをしていた、どうやら、なにも成長してないらしい、俺もレナも。

「そつえば真琴？ 今日仕事なの？」

レンジで暖めた煮物とお櫃に盛られた炊き立てのご飯を持って、台所から居間に入ってきた奏の言葉に静かに考える。夜の仕事はあらかた終えた、現状で早急に対処すべき点は特にない。“ゴーストブラネット”と俗称されている現象の調査は必要はないと上からのお達しが昨晚届いた。テレビで日夜囁かれてるこの現象の無視というのは上も大概なものだ。

それなら現状で片付ける用事はなにもない。

お茶碗に盛られたご飯を受け取り俺は両手を合わせていただきます。と、だけ言って奏を待たずに食を進める。

俺は箸を持ち、玉子焼きを掴む。そして咀嚼。……俺好みの塩が少し強めに効いた味だ。レナのはやっぱり甘めに出来てるのである。箸と茶碗が用意されている他のおかずにはラップをして奏が卵焼きやその他おかずを持つてくる。よく見れば煮物の量も二人分にしている。自分の仕事の中に帰ってきてても朝ごはんをすぐに温め直せば食べれるようにと、奏の配慮であろう。

どうせ、俺が朝食を食べた後におにぎりでも作っておくのは目に見えてる。そんなあたり、こいつの人気の要因とかなのかもしれない。小さな心配りを欠かさないのが奏だ。

……玉子焼きを個別の趣味に合わせて焼くあたり料理好きは知っている。学生時代は炭化したおにぎりをだされたような……気がする。そう考えれば素晴らしい進歩だ。

「嫌味？」

軽く眉間に皺を寄せて、逆三角のようなジトつとした目でこちらを睨んでくる奏は、静かに定位置に座る。向かい合うような形で食事を取るのに随分と慣れたようだ——来て当初は目を逸らしたりと挙動不審だったからな……。

「朝の仕打ちに比べたら、な？」

「うっ」

復讐完了。まあそりやお前が町内会長のところに一人で出向きたい気持ちにはわからないでもない。奏の父親の姉——叔母にあたるその人は奏を昔から可愛がっており、俺と奏の関係をそのころから誤解していた奏曰く『危険人物』らしい。高校卒業以来、姿を消していた俺になぜだか説教までしだしてきた。

だが、最たる原因はこの十数年、男をつくらなかった人間ではないだろうか？ 結構適齢期を超えられては、たしかに叔母として娘の心配はするであろう。

「で、手伝うの！？ 手伝わないの？」

凄みを効かされ問われる。これ以上、奏で遊ぶのは俺の命が危ないかもしれない。どうせイライラの原因は“あの事”より、式はいっ拳げるのかとか、そういったやりとりで全く進まなかったのだろう。一応、神主代理としての俺も出席はしないといけないのだが顔を出すなと凄まじたりしている。

町内会の方々にも出席率の悪さとか言われるが、大半は『奏ちゃんは今からいい子でね』と、いう内容であって、俺がノコノコついて行って顔を奏と一緒に出したら、その日は俺は謂われる罪に囚われるのだろう。

「そうだな……」

それだけ言うと、俺は再び考え込む。奏はエプロンと三角巾をたたみ何時もの場所に置くと目の前に整然とした態度で正座をする。そこにはやはり身に付いた気品というものがあり、背筋を正し美しい姿勢のままで、真剣な目で俺の様子を覗き込んでるのがわかった。

もう考える必要は実際ないし、ここまで考えを引き伸ばして遊ぶのも少し可愛そうだな。俺は静かにため息を捨てる。何度目のため息だろうか？ 数度静かについていたため息とは違い、あからさまなため息は今日始めてか……？

気怠いのもある、よく金曜日だか土曜日だかよく知らないが、押し入れて眠る謎のカラクリたぬきの次にやる家族アニメ。その父親が日曜日の家族奉仕を気怠く思うのがよくわかった。そんな気がする。

「わかった、付き合う」

だが、決まっている今日の過ごし方を無視するのも考え物だ。

俺は今日の仕事を言い渡してくる奏を他所に思考を他所にやっていた。箸が震える、手がその状況を理解しようとしていないのである。

……やられた。負けを認める。素晴らしい戦術だ。

今日の献立にある茄子の味噌汁に俺は手をつけることはなく、朝食はそこで終了した。

* * * 8月12日 同刻 自宅 SIDE 小鳥羽雅人

僕がそれを聞かされたのはつい今朝のことであつた。

8月も終盤、夏休みも終わり気怠い感じがぬぐい去れない始業当日。いつもよりも早めに起きて用意をする。今日は授業がないから比較的カバンの中身は軽い。しかし、夏休みが終わってしまったという何年経つても、夏休み明けの学校は憂鬱にさせてくれる。

その分、授業があるようにカバンが重くなったり、気煩れてきた

真新しい学ランせいふくに窮屈さを覚える。こんな夏場にボタンを全部止めるのは流石に窮屈なので家の中だけ開放感に浸る。襟のホックを外しただけで息苦しさは結構違ってくる。

階段を降りると今の方からコトコトと煮込む音と食指を伸ばす、味噌汁の臭いが鼻腔をくすぐる。このまま台所にいる親に挨拶するのもやぶさかではない。しかし、せつかくの朝ご飯はさっぱりして食べたいと、腹の虫が僕に訴えかける。

今のモヤモヤしてる気持ちをさっぱり洗おう。

僕はそう決心して洗面所に向かをととした。

「マサト雅人」

唐突に呼ばれたために振り返る。リビングから出てきていた父さんが僕を呼び止めた。何の意図かはわからないが、その目は「話がある」と語ってるのは、もう分かってしまう。けども、こんな時間に父さんがいるのも珍しい。いつもなら会社に出社してる時間はずだ。

最近は帰りが遅かったので仕事が一段落したんだろうか？ しかし、この町内のお調子者と知れ渡り、町内会では嵩波さんにセクハラをしては会長さんに怒られ、母さんにしばき倒されるような最低な野郎。人間のゴミムシにも等しい男だ。そんな男だからこそ、似つかないのだ。

「どうしたの、父さん？」

だから極めて平静を保ちながら分かりきった事を質問する。寝汗

とは違う、嫌な汗を背中少し感じてしまう。今まで気にならなかった玄関先にある芳香剤の香りが鼻につく。さっきまで心地よく感じた味噌汁の臭いは、吹き消されてしまったのかのように、息苦しいだけの時間が過ぎていく。

渋るように父さんは、ため息を落とすように言った。

「少し話があるんだ」

視線だけでリビングを指す。いつもとは違う様子にただただ戸惑う僕であつたが、小さく頷いた。

カバンを適当な場所に置いてる間に、父さんは母さんに一言二言何かを話したら味噌汁にかけていた火を止める。非常にだらしないが、水仕事で濡れた手を（その歳で恥ずかしくないのかと、思える）ファンシーなピンクの子豚とか子猫とか散りばめられたエプロンで拭くと、テーブルの定位置に座る。

僕もそれに習い座る。相変わらずの辛気臭い空気。そろりと母さんの顔を覗くと、何を話すのかと不安がってる訳でもなく、知ってるという顔だ。正直、母さんは楽天家でゴミムシで駄目人間な父さんとは違い——いや、まったく正反対な人だ。比較的は無口で規律を大事にする人、前に一度門限を破った時があつたが父さんが帰ってくるまで締め出されていたことあるくらい厳しい人だ。ついでに言うなら無口で何を考えているかわからないというのもある。

そんな母さんではあるが、僕の一番信用できる大人であり、一番信用ならない大人——父さんの妻であることに今でも疑問に思う。まだ純粹だった頃に聞いた話では、母さんが父さんにベタ惚れだったと聞かあやしいものである。今でもそう思うことは少なくない。

一時の母でありながら謙遜も臆目なしで美人だ。よく女性のような服装をゴミムシは僕に買ってきて強要するが、それもこれも近所の方々曰く『母親似』であるが故かもしれない。

そのお陰で中学時代はコンプレックスとなり鍛えていたこともあったが筋肉はつかずに柔らかい二の腕に脂肪も筋肉も特筆して何もない腹筋。ちよつと言うなら余計に線が細くなってしまった気がする。むしろダイエットに成功してただけで、その情けなさにもうトレーニングなんかはしていなかった。

「それで、話つてなに？」

その黒歴史に嫌気がさし、僕は流れていた沈黙を破った。

すると、実験に使っているマウスの餌をやり終えた父さん——こんなゴミムシでも世の中では生物学の権威である。言ってしまうなら凄い博士で僕の通う学校にも勝手に多額の補助金で支援しているらしい、よく机やTV、実験機材など学校の備品の品替えにありつけてラッキーと思っていたが、自分の親がそんなことをしていたということに、理不尽な怒りが沸いたこともあった。

「雅人、パパが何をしてるか知っているだろう？」

パパとかキモイ。

「……神徒計画第一実験機関統括所長小鳥羽真司^{コトバシンジ}」

——最低な生物学だ。

それで創られた子供達は、戦争の道具、愛玩、虐待、実験…数え

きれない仕打ちを受けているのは知っているだろう。なのにこの男は鳥栖深全体の負の遺産で多額の収入を得ている。もちろんそのお影で僕は不自由な生活だった。しかし、決してよかったとは言えない、『リアル主義』でもない、言葉の意味もわかってなかった子供のおかげからクラスでいじめも受けていた、『ファンタジー主義』といくら罵倒されたことやら。

それは、僕の記憶の奥底に鎮めたこと。親がその研究者だからといって、僕がそれを肯定してるわけでもない。生命の冒涇に値するものだ。決して『第二次生命体』——GHと呼ばれる彼らを差別する気はない、ただただ……そんな受精卵から弄って神とか、半世紀前に見つけられただけの、本当にあるかもわからない存在に近づこうとする人たちが愚かに見えるだけだ。

『リアル主義』と『ファンタジー主義』の抗争はどの世界でも常にニユースに取り上げられている。戦争も始まる勢いだが決して『リアル主義』は戦争を起こそうとはしない。自分たちの負けは目に見えているためだ、『神徒』は遺伝子から弄り回され神様に近づいた人間。多方面な才能をもち常に第一次の^{リアル}一步先を歩んでいる、大きな例を挙げるならインシュタインが命を賭けたとも過言ではない統一場理論、その解を出したのも彼らであり、運動能力にも決定的な差が生まれた。

科学力・武力。何よりもこの計画の後ろ盾には古都宮がいる。世界をまたにかけ支配してると言っても過言ではない財閥。それを相手にするのは第一次では無理な話だろう。故にあまり物騒なニユースにならない、暴動はあっても大抵は第一次に^{リアル}比のあるものか、偉い学者が論争している位だ。

「実はな、」

それを聞いて満足したのか。神徒計画を復興させ、その研究所を統括する所長である父親は多少言いにくそうに、次の言葉を貯める。

こついつた無駄な動作や時間がイライラさせる。

「父さんの職場、倒産しちゃった。てへっ」

………は？

え、なに……？

「ギャグ？」

「マジ」

「ドッキリ？」

「んや」

「おちよくつてる？」

「そんな訳が」

この研究には古都宮がバックについてる。あの破産なんて地球が瓦解してもないとまで言われてるんだぞ、ありえる訳がない。研究の打ち切りなんてニュースにはなかったし、ましてやこの愚父^{コニムシ}がいるのは本部だ。それが、倒産——？

そんな訳がない、古都宮がバック。安心は世界の法則にほど近い。それほどの大手財閥なんだ。

いや、まてよ……この愚父が本部の統括所長であるがために見放されたのか？

「どついつこと。」

比較的冷静なはずの母さんに僕は聞いてみる。

「初耳よ」

……僕はこの人の息子である自信を失った。さっきまで冷静で表情を変えなかった母さんなら事の始終を知っているもんだと思っていたが、これまた表情を動かさずに『知らない』と答えた。僕は本当にこの夫婦の息子なのかと問いただしてやりたいが、このゴミムシは僕が出産後、母さんに抱き抱えられてる写真を肌身離さずもつていやがる。気持ち悪いし、この現実に嫌気はピークだ。

「……遊^{ユウ}姫、すまない」

「……わかりました」

謎のやり取り。煮え切らない気持ちはピークに達してきた。

ひとつ、小さく息を吐いてから、この積もり積もった黒い感情を

「説明、ダメ」

吐き出すことは叶わなかった。母さんは表情を変えずに静かにするようと、僕の口に指を押し当てる。出鼻をくじかれた僕は助けを求めるように父さんを見てしまう。こんな時に限って頼りにしてしまうあたり、僕は僕自身に嫌気が差す。すると父さんも説明する気はないのか目を伏せ、沈黙していた。

「つつ——」

「雅人、これから何があっても夜には外に出るんじゃないぞ」

歯を食いしばる僕に、父さんはそう告げた。

どこか遠くからチャイムが鳴る音が聞こえた。何度も何度も繰り返される。どれぐらい時間が経ったのかもわからないけど、わかった事はひとつだけ。

新学期、学校から帰ってくると家には誰もいないということだけだった

【1 - 1】空想幻視

通学前の朝の風景とは一体どんな物を想像するだろうか。

朝早く起きて弁当なり朝食なり作る？ 親に遅刻ギリギリに起こされ素早く仕度をする？ それとも遅刻まで寝過ごすのか？ 流れる朝の報道ニュースや新聞を眺めながら優雅に過ごすのか？ 早朝から走り込みなどトレーニング、部活の朝練に向かう準備をしているかもしれない。

少なくとも、だ。

「……………」

恋人に白い目で見られながら、鞭打ちでソファーから動けなくなっている光景はあまりないであろう。ただ、耳に流れてくる最近になって相次ぐ連続暴行事件のニュースだけは、守られてる朝の光景なのかもしれない。

「そうかそうか、なるほど」

わかってない。絶対にわかってない。わかってないのにこいつは先入観からか嫌な納得をしている。それも凄まじい勢いで。非常にめんどくさいことになってる。

「プリンを待ちわびる私を無視、しかもメールまで無視して自分は歓楽街で鞭に打たれてきたんだろ？」

「んな訳あるか！」

ってか朝にする話題でもねえ。ヘビーだ、ヘビーすぎる。しかし、ありのままの事を話すと夜中の公園に不審者が表れひたすらに鞭でいいようにやられなんとか撃退したという内容になってしまふ。正直、オレなら信じないような話になる。だが、この蚯蚓脹れして動けない程の激痛が走る。そのお影でシャツが血まみれになり、家で力尽きてソファで寝てしまった。それもプリンも買わずにだ。明らかに話して納得してもらうのは苦だ。

「見ろ、さすがの歓楽街でもこんな血まみれになるまで鞭で叩かないだろ！」

「わからんぞ、意外とマニアックだからな……、和也」

こっちは骨にヒビが入ってるかもしれない重傷なんだぞ？　ってか変態扱いすんな！　朝っぱらから上半身裸にしてオレは本当に何を言っているんだろうか。別にオレは特殊な性癖などありはしない。しかし、朝っぱらに男は上半身が裸で正座、女は椅子に腰掛け白い目で睨んでくる。これは学生の通学前の朝の光景と思えるだろうか？

断じて否だ。そしてオレはそんなやましいことなどしていない。

「クレア、お前の言うようにプリンを買い忘れた俺に比はたしかにある」

コンビニでどこも品薄ということすら信じない。あのコンビニのレシートを見せようとしたものの、あの公園に財布を落としてしまったのだから立つ瀬はない。正直に何度も言うがオレなら信じないし、クレアに鞭を打った連中を地獄の底に落としてやりたいほど嫉妬のような物をするだろう。

しかし、変に嫌われるのも嫌だ。

つまりはそういうわけだ。

「それにオレの状況説明が意味不明なのも重々承知の上だ」

だけどこれだけは言っておきたい。

「そこで暢気に飯を食ってるクラスメイトは重要参考人だと！」
「ふえ？」

間拔けな声を出すのは入学式の日の名簿はなかったものの、始業の時に転校生として謎の入学をしてきた同じクラスの女生徒で家を出てきた上に傷ついたオレをここまで運んできた怪力少女——レナ・フォード・ライズ・ハールドである。

正直、赤の他人に半裸なのかと聞かれたらシャツが裂けていたし血も凝固し傷口には不衛生なためだ。包帯でも巻こうと悲鳴を上げる身体を無視していたところ、起きてきたこいつに見つかったためにこんな姿でいる。しかしだ、さらなる赤の他人がこの光景を見たらどうなるであろうか、まるで浮気現場である。

そんなめんどくさいことにはなりたくない、こういうことに五月蠅い隣人がいるのだ、そいつとこの現場との遭遇は決してしてはイケない。奴はクレア以上に頭が固い、それはオレのちっぽけながらささやかな人生経験と、今年で共に16歳になるもの同士——今では15年を超える付き合いとなっている。だから、意図もたやすく想像できる。

「和也……、これってどういうこと？」

そう、こんな感じに威圧感を——ん？

殺気。その殺気の塊が発せられる後方、玄関から廊下をわたってすぐに存在する茶の間。そのドアの方を振り向く。肩を震わせ、今日新学期を迎えるわが校の制服を着た女生徒。関係は腐れ縁、ポニールが高校に入ってからからの流行りらしい、非常に頭の固い女。実はちよつと苦手なのは秘密だぞ？

基本的にオレとクレアしかない自宅、それに女の子が2人、しかも共にクラスの知り合い——変に言えばハーレムな状況。だが、流石にこの言葉が漏れてしまうのは摂理のようなもの、オレから言えば整理的な現象にほど近いこの言葉。

「くつだらねえ……」

中学時代のとある頃から封印してきた口癖。それを久々につぶやいてしまった。

「つたく、食物の恨みは買うもんじゃねえ」
「かずやー、そんな夜遅くに出歩くからよ」

へいへいそうですかーと、適当な生返事で返す。レナをなんとか泣き落して証人にしクレアは納得させたものの煮えきれない子猫が約一名いた。今も不機嫌そうに車道側とは反対を歩くこのポニールを揺らす幼馴染、そのまま自分の尻尾を追いかけてくれたら非常に楽なんだがそこまで馬鹿ではない。

目を半月のようにしてジトとした目でこちらを睨んでくる。こ
う細かいことまでつかつてくるからこいつは苦手なんだ。まあ昔
の素行が素行だったしこいつにはすんごーい迷惑をかけてたから
頭は上がらないが、あまり頭も下げたくない。

「くっだらねえ……ンなの今更だろーが」

「あ、また『くだらない』とかいう！ ダメだよその口癖！」

くっだらねえ……。と、吐きかけたがそしたらまた五月蠅いので
控えておく。朝っぱらからこいつの注意を聞かされるなんて始業早
々についてねえ……。それでもクジ運はいい方だと自負している。
しかし、こいつとの相性の悪さというか、とっつきにくさというか、
時折ついていけないことが多い。

昔は、そうでもなかったんだよね……。いつからだっけ、魅夜^{ミヨ}
がここまでオレに構ってくるようになったのは？ 中学？ うちの
両親が事故で他界してこいつの親父さんたちが親代わりになつてく
れた頃？ 身寄りをなくしたオレの唯一の肉親であつたじつちゃん
が死んでしまったころだろうか？ それもまた違う、たしかにその
日から頻繁に顔を出してはいたが、オレは家に寄り付かなかったは
ずだ。

……最初っから？

「……」

「聴いてるの？」

やけに低いトーンでこちらを睨んでくる魅夜。そう、オレの知っ
てるこいつはいつもこんな感じだった気がする。とたんに嫌気が溢

れ出す、そして生理的現象が再び訪れる。しかし奴の監視下、非常にくっだらねえがくっだらねえは自重しよう。

「聴いてるってーの、小うるさいから通学くらい静かにさせろ」

「う、うるさいって……、和也ア！」

あー、こんな通学路で朝っぱらからいちいち怒鳴らないでくれ。ただでさえ有意義なはずの朝の時間を犠牲にしたんだ、ただでさえ憂鬱なのに街の人からいらない視線をぶつけられたくはない。ただでさえ不名誉なことにオレの悪事は千里を走ってるんだ、余計な噂はお断りしたい。

普段自転車で通学してるものの、たまにタイミングが合うと並んで通学することはある。見慣れた光景ではあるものの、目が痛いのも事実。町内の方々にはゴキブリ以下の害虫のような扱いをされている。そりゃちよつとはやんちゃでやりすぎたこともあったさ。傷害事件や公務執行妨害、器物破損上げればきりがない犯罪をのらりくらりと暴れてはいたが大半は相手からけしかけて来るんだ、言ってしまうえばオレは悪くない。ただ『やりすぎてしまっ』ことが多いだけだ。

つまりオレの黒歴史『くっだらねえ伝記』の中のオレはどのような人物か、それはもう考えてもらえればわかると思う。

「はあ、内地は今まだ夏休みなんだよなあ」

「あっちは9月になるまでじゃなかった？」

そう考えると理不尽ではあるが、古都宮は何の嫌味か冷暖房が完備してあるというで、夏休み冬休みがけっこう早い時期に執り行われている。7月頃から8月中頃まで、結構な長期休暇なのは間違いない。

ないが冬休みは少々短めに設定されてるのは学生の苦しみにほど近い。

いくら冷暖房は学校につくと完備されて快適だからといってこの気温はまさに地獄。阿鼻叫喚ともいえるアスファルトジャングルだ。それもこれも元々は海底火山の噴火などが原因で作られた島に金で雇った建築技術師を使って広げた人工島にほど近い鳥栖深だ。オレが生まれる以前から古都宮のバックアップのもとで『街に緑を』というボランティアが盛んであり、今では人工林などもよく見かける。

「ちよつとー、2人の世界を作らないでよ！」

びよんぴよんと飛び跳ねて自分の存在を主張する馬鹿。見てるかに暑苦しいし、ここまで元氣だと逆に引いてしまふ。明らかにサイズとは不釣合いのワイシャツをだらしなく袖を垂らしながら着て（どうやら腕の長さが足りなく指先が出るかも怪しいしたため）、暴れられても周囲から奇異の目しか集めない。

なによりも目立つのは上下着ている制服のサイズがあべこべなのもある。なににせよこいつは家出をしてきたため制服を持ってきていないようだ。学校をサボると親代わりになつてる神堂さんを怒らせるためにそれはできないということ、長期休暇を挟んだため換えのワイシャツがあつたから着させ、魅夜には悪かつたが換えのスカートを用意したためこんな現象が起こった。

本来なら魅夜のワイシャツを使うはずだったが、「萌えるでしょ？」と訳のわからない理由から膝ほどまで隠してしまうワイシャツを着ることにした。正直、クレアは大笑いしたものの魅夜は猛反対、なんとか宥めて今に至っている。

そして時刻は8時12分を超えた。始業は30分である。ちなみに普段はチャリで通ってるものの状況が状況なために徒歩で学校に向かっている。オレの家から学校までおよそ20分はかかることを考慮すると、正直くっだらねえ無駄話なんてしてる余裕はない。

「べ、別に2人の世界って訳じゃ…！」

そうやっていらぬ事を言うからくっだらねえ誤解をつむんだつて。

「へー、柴原さん^{シバハラ}って案外素直かも」

ジト目でオレと魅夜を交互に見てから面白そうに声を弾ませる。

なんでこうなるかなあ……。くっだらねえを通り越してクソくっだらねえ…。

レナがくれた茶々から始まる女子高生がするようになすべきでないような話をすべて聞き流しながらオレは密かに昨晚の事を考えていた。あの妙に居心地の悪いような良いようなオレの日常に耐えかねて外を散歩していたオレは特にすることもなく無駄に時間を過ごしていた。

そこでクラスメイトとの深夜の出会い。多分、その先に起こったことはオレよりもコイツのがわかってるには違いない。昨晚はあまりの疲労とダメージで受け答えもまともに出来なかったが機会を見て聞くことにしよう……。知る権利くらいはあるよな……？

頭に浮かぶいくつもの憶測を頭の中で消しながら、ひとつの結論にオレは至っていた。“いつも”なら“いつも”の通学など街の住

人は興味をもたないであろう。ただ夏休みが終わって“いつも”が繰り返されるだけのこと。ここまでオレが変に脚光を浴びてるのは、この2人の奇行もあるかもしれないが、最たる原因に挙げられるのが朝のニュースでも流れていた連続暴行事件の犯人だと疑われているのだらう。

昔から素行は決して良いとはいえないオレだ、街の人からの心証も悪ければ信じる義理立てすらない。

ニュースをろくに見ることは出来なかったが、断片的に、BGMとして流れてきた言葉を思い返す。最近、といっても『ゴーストプラネット』との発生と同時期から起こっている深夜の事件。因果関係は不明だが、その殆どが俺と同じく背後から、もしくは物陰からいきなり出てきて襲われたというもので、どれも深夜の時間帯ばかり。同一犯と思われるが目撃証言はどれも合致せず、被害者の負った傷などもバラバラで統一性はない。

断片的に、確実に。思い起こせ。今に始まったニュースじゃないんだ。

しかし、ゴーストプラネットとの因果関係は不明で、いろんな机上の空論は飛び交う物の『ファンタジー主義』のような事を言う。最も有力なのは夜間でも明るいため外出者の増加などからそう言った猟奇的な存在がゲーム感覚として繰り返らるるのではないか、そんな話ではあるものの、簡単に否定だってされる。そりゃ外出者が増えれば、いくらなんでも目撃証言が出ないのはおかしい。

……正直、『リアル主義』だの『ファンタジー主義』だの興味はないが、目撃証言に挙げられる様々な形容がどれも人のものではなかったり、人のものであっても“おかしい”というのも聞く。そこ

から『リアル主義』はよく、『ファンタジー主義』の化け物が」
などとわめいている。

しかし、学会の論文で明らかになっているがヒト受精卵に移植された『神徒』は如何に能力を得ようと人の姿形になるのは変わらない。たしかに放電体質や超自己再生など明らかに人体のスペックを超えているのは確かだが、ありえないことだ。可能性は0じゃないにしろ、そこまですることじゃない。

……、結局は机上の空論。空想のように本質もなければ、答えはない。

「和也、聴いてるの？」

「——…、」

しかし、どちらにせよ、くっだらねえことにかわりはない……。関わらないのが吉。何事もそうだ、目の前のくっだらねえ事は適当に処理をして、他人の領域、ましてや世間様を騒がせるような問題なんかはオレが抱えるべき問題ではない。火の粉さえ振り払ってればいい、夜な夜な遊びに更けるクレアさえ守ってればいいんだ。

「あ、危ないよ雨宮くん」

「——…、ん」

呼ばれた気がする。考えを放棄してふと顔を挙げると信号があった。それは危険を示す赤ランプ。いかんいかん、通ってしまうところだった。変に考え込んでもいいことなんてねえもんだよな。そう何もわざわざ信号を無視するようなことではない、青に変わるまで立ち止まるべきだ。

足を止めたところで違和感を覚える。

「車道に出ちゃ——…」

ああ、そうか。歩道前にある障害者用の点字ブロックを踏んでないのか。つーことはあー……。ブレーキの甲高い音。ゴムの焼けるような匂いと視界に広がるのはにくつたらしい青空に薄白ながら月のように存在感を表す異常現象。ゴーストフラネット

……なるほど、撥ねられるというのは案外と気持ちいいもんだ。別にマゾっ気はないがここまで一瞬を長く感じて空を見上げたことはないだろう。

うむっ、貴重な体験だな。

「よっと」

撥ねられ失った方向感覚を呼び起こす。この間は数瞬はかからない。身体の脱力から軽く力むこと。身体に全神経を行き渡るのを確認すると、空中で姿勢を制御。撥ねられて大して高さは飛び上がってない、頭をガードするように腕を曲げて後頭部をガード。ブレーキ音がしたということはこのまま再び轢かれるということはずない。簡単な動作だ。

まあ、オレに限るが。

結構強い衝撃が左腕から全身に走る。うおー、予想以上に痛え…。

そのまま流れにそって転がる身体を右手で固定っと。

ふむ、初めて撥ねられたがこんなもんだろう。

うわぁ、すきっ腹だつてえのに空中で何回か回転しただけで胃の中が逆さになつてゐるようで気持ちわるい。しかし胃に何かを詰めてたら逆流してきそうでやだなあ……。こういった“常識外の能力”つてのは極力見せたくはないが、魅夜なんて知つてゐるし、レナも昨晩のことであつてゐるだろう。まあ、ドライバーにはちよつと気の毒かもしれないが、自衛のためだ。喧嘩には使わないし許せ。

「大丈夫、和也？」

愚問な事を言う。腕がめっちゃ痛いに決まつてゐるじゃねえか。頭を守つた左腕は打撲だし、身体を抑えるために強めにアスファルトに抑えた腕は焼けるかと思つた。熱を含みすぎだろうが。まあ、「大丈夫？」つて意味はそういうことじゃないんだろうけど。

「つつつ——！！！！」

しかし、痛みというのは非常なもので派手にぶつかったためか、昨晚に受けた鞭の傷跡が痛み出した。それも激しく。

「待つたタンマ！　ちょーいてえええ！！」

ぬうおおお、骨がどうにかかなりそうなくらいに打たれたためか、今朝は立てないほど深刻なダメージだったんだ。それにたかが鉄の塊が減速してぶつかった程度でこれほどの痛みか！？

わ、わりにあわなくてくつだらねえ……！

「うわぁ、うわうわ！　背中血まみれ！」

「きゅ、救急車？ 救急車！？ えつと、えとー110番！？」

そりゃ背中をあれほど打たれたし後頭部は守っても背中はずつつたからな！ 出血はするだろうに！ つか違う！ 110番は違う！ 緊急通報用電話番号は覚えてて損はないぞ、レナ！

って、ツツコミしてる場合じゃねえええ！ これから学校行くのに血まみれでどうすんだよ！

ポニーテールと柔らかそうな金髪を揺らしながらあわてふためく馬鹿2人をよそに、黒塗りの高級そうな（いや、高級なんだが）ベンツがオレの横で止まると後部座席の窓が開く。ちよつと文句でも言つてやるうかと考えたが、そこで思い至った。

この時間にこの通学路、そして派手にベンツで登校といったら数ヶ月同じ教室にいたアレの顔が否応なく思い出させられる。結構、会いたくない奴であり、クラスに毛嫌いされてるオレに臆することなく話しかけてきた――毒舌女の顔が出てくる。

「あら、死ななかつたの」

ウィンドウから顔をだした少女の第一声は、辛辣なものだった。

【1 - 2】空想幻視

朝、それを自宅の前で迎える。それほど孤独に震えそうな迎え方はあるだろうか。元はといえば家の鍵を落としたのが悪いのであって、非があるのは全面的に俺。衝動的に食いたくなつたプリン人は人知れず深夜に細々と食していた。寂しさのせいか、甘いはずのプリンはなんだかしよっぱかった。

カランカラン。と、“店”の扉が開く鐘の音に意識は覚醒する。どうやら孤独と不甲斐なさのあまり気を失っていたらしい。今日から学校が始まるというのになんたる失態だ。

そろそろ開店準備の時間。祖父母が営む小粋の聞いた喫茶店。最近祖母がはまり出したデザインカプチーノが人気を呼び、それなりに入っていた客足もそれなりに増えてると聞くと、夏休みの期間中に手伝つてる姿を見てなんとなく感じている。

それもこれも、この『不幸』は――…

「なんだ、時人。外にいたのか」

祖父が気がむいたときにしかやらない店先の水撒き。それを顔面でヒットするくらい、俺は『不幸』というか『不運』というものが連鎖しやすく、割った皿の数、ポットを落として足を火傷し、酷いのであれば足を滑らせてお客さんの顔面にケーキをぶつけてしまつたり（この場合はお客さんも災難だが、祖父の怒りなどは俺に全面的に来る。仕方ないことなんだが。）などなど、ひたすらに日常を犯しているため、「手伝うな」と、厳しく言われてるのだった。

燕尾服のような格好をした初老の男性。朝倉宗太は敬愛すべき祖父である。なにより、この朝帰りってタイミングは非常にマズイ。

「して時人よ、若いうちに朝帰りはいかんぞ」

うつ、はじまったよ。感慨深いように、そして思い出すように、祖父^{じい}さんは言葉を紡ぎ出す。

「わしも若い時には明け方まで街の女の子と夜を明かしたもんじゃ、2軒向かいの鈴木のはあさんともよくよくホテルで一泊したもんだ。その頃はまだホテルも利用が多くて何軒か断られることもあったんじゃぞ」

知りたくもない情報を！ あんたの孫はお隣さんとうとう接したらいいかわかんなくなつたよ！ そ、そういえば鈴木のおばさんよくよく俺を「祖父さんと似て、いい顔立ちになってきた」と、よく聞くけど……それって変な意味はないよな？ ないよね！？

急に寒気がしてきたのは服が濡れたせいだと信じたい。

「そうそう、あれはこんな真夏の日だったかのう」

いやいや、祖父さんが学生のときつて鳥栖深はあつたのだろうか。あつてもそこはなんとかっている独立国家だつたと思う。うちの家計つてその代から続いていたのだろうか。おそらく研究者か何かならないこともないと思うけど……、となれば、嘘だよな？ 祖父さんが、研究者だつたなんて話は聞いたこともない。すくなくとも半世紀以上も前なんだ、別に気にすることじゃない。

落ち着け、落ち着くんた。

祖父さんが語り紡ぐ昔話を流しながら、俺は祖父さんの脇から顔をだした妹——相変わらずのダサイ学校指定とは違う寝巻ジャージを着込んだ、色気も何もない妹にアイコンタクトで兄を助けるように指示を出す。

「兄さん！」

「ははは…、おはよう真希」

「む、起きたのか真希」

そのアイコンタクトが通じてか祖父さんの昔話は途切れ、駆け寄ってきた真希は水撒きに使うため、置かれていた水の入った桶に足をぶつける。そのまま倒れてくる妹。しかし、蹴っ飛ばしたためか足元に桶はない。

一体どこに——、そう考える間もなく先程と比べ物にならない量の水が俺を襲い、桶がド○フのコントよろしくに見事に当たったのであった。

余段ではあるが、倒れてきた妹の頭が見事にプリンの詰まった腹にヒットしたのは秘密である。なんせ、中のものをぶちまけそうになったのだから。そんな汚い話はしちやいけないのだ。

「まったく、兄さんも不注意がすぎるんです」

「はい、反省しております」

プンスカと、怒りを露にしながら焼き魚を箸で突つつく妹に今日何度目かの反省をすることにする。ついつい衝動的に食いたくなつたプリンを真希と山分けするという誓約の下で。真希のお金で買ってきたプリンを寂しさと孤独を紛らわすために食ってしまったんだ。反省しないといけない。

もともとは『不幸』からか財布を落とすなど日常茶飯事であるがため、お金というのはあまり持たせてはもらえず、祖父さんが補完しているのだ。そして俺の不幸は家族公認で最悪とさえ自負している。

……なんだか虚しい。

味噌汁とご飯。祖父さんや祖母さん、真希とも違うラインナップ。単純にこれが結果というやつだ。

「うー、真希」

「却下です」

まだ何も言っていないって！　ただちよつとおかずを分けてさえくれないのかこの妹は！

今朝とは違い、まだ真新しい『聖涼大学附属高等学校』の制服を着ている妹は、3年の俺とは違って制服もへたつておらずに新鮮味がある。ここは褒めちぎつてもオカズを――…。

「食べ物への恨みは怖いんですよ？　兄さん」

「ちよ、こら！　テーブルに隠れて足を蹴るな！」

「蹴ってないですよ、嫌だなあ」

蹴ってるって！ 蹴られてるんだから！

「まったく朝食の時間くらい静かにしないか」

「そうですよ。賑やかなのもいいけど時間を忘れないでね」

それを静観していた祖父さんや祖母さんが注意をしてくれる。しかし口調は優しいですけど祖母さん、元はといえば孫のオカズを抜くという暴挙はいかなものかと。いや、まあ昔からの信用の問題で財布をよく落として歩いていたためか持たせてくれないのもわかりますが、もう18歳なんですよ？

これから就職とかいろいろめんどくさいことになるんですけど、それなのにこの小学生の待遇。

うう、プリンに引き続いてご飯までしょっぱい気がする。

『それでは、次のニュースです』

聞きなれたニュースキャスターの声。聞きなれた言葉、でもついつい新聞部でありニュースを求めて歩く真希はテレビに視線を向ける。テロップには『鳥栖深夜間連続暴行事件』と書かれている。

……昨夜のアレ、多分……これだよな。

ハッキリと姿が見えたわけじゃない。街灯の明りとゴーストプラネットのぼやけた明り。そのお影で物陰にいても少しは周囲のことを見やすかった。でも顔を見たわけでもない。

『昨夜未明、地元の高校生3人組みが何者かに襲われて病院へと運ばれる事件がありました』

……俺が見たのは形容しがたい“バケモノ”に長身の男が襲われてるところだ。薄明かりしかないと、ぼんやりとしているがそれには間違いない。紆余曲折はあったものの長身の男が“バケモノ”を撃退したかのように思えたけど……。

「最近が多いですね」

「真希も時人も遅くならないように気を付けなさい」

「はい」

「……………、うん」

祖父さんが何かを言ってきた気がするが、俺は相槌をうつ程度で答える。多分、俺に向けて何かを言ったんだろうけど耳には入らなかった。ニユースを食い入るように見る。箸は止まったまま。

『3人は共に刃物で切りつけられたように酷い怪我を負い、今も意識を取り戻さないとのこと。しかし、その刃物は包丁やカッターではありえない傷だと主治医は主張し、専門家の立会いの元、犯人究明のために捜凶器の特定にあたっている模様です』

…… 昨晚、見たのとはまるで違う。俺が見たのはまるで腕をしならせて鞭のように扱っていた。“ソレ”と対峙していた“彼”は大丈夫だろうか。なんせその鞭の一撃は土いえど地面にめり込んだんだ。到底大丈夫のような気がしない。

『同日、青雲市嶋野町にある公園で何者かによって遊具を破壊された形跡があるのを近隣を巡回してた警備員が発見しました。事件の因果関係は不明ですが、何者かと争った形跡が見られ……』

ついつい、「あ」と言葉が漏れる。それに連れられるように真希

や祖父母の視線はうちの近所にある公園に注がれる。見慣れた光景ではあるものの、見慣れない形に遊具を支える鉄がひしゃげたりしている。そこはたしかによく遊んだ公園、正直こんな体質であるから遊具にはほとんどいい思い出はない。

ただ、昨夜の光景は暗く細かなとこまでわからなかったが、ここまで激しい爪痕があつたなんて思ってもいなかった。

「うちの近所ですね」

「最近は何事だからな」

祖父母はちよつと冷たい目で俺を見てくる。言いたいことはわかつてるそんな時に夜な夜なふら歩いた俺が悪いんだ。とても頭の中で反省する。

しかし、そんな中で真希は訝しむように、俺を見てくる。とつても輝いていた。

「にーさん？」

「し、知らない！俺は知らないからな！」

新聞部の期待のホープはそれを察したらしい。いや、実にその通りだ。とても勘の良い妹。俺は味噌汁も中途半端に学校指定のカバンを掴み咄嗟に立ち上がる。

「まだ何も言つてません」

「ぼ、墓穴かあああ！！」

遅れて勢い良く立つた真希。目は草食動物を追う肉食動物かのような目を光らせた。俺は慌てて踵を返す。捕まっては新聞部に連行

され自白剤を飲まされる。うちの新聞部には薬学に精通したり精神学に精通してる奇人変人の集い。生徒会や風紀委員のブラックリストにいる連中だ。

そんな連中のところに連れられたくない。

「待ちなさい、兄さん！」

「祖父さん、祖母さんいつてきます！ 店頑張つて！」

言うことだけ言つて俺はリビングから逃げていく。あー、くそ！ 真夏になんで遅刻ダッシュしないといけないんだよおおお！

こうして俺は遅刻する時間帯でもないのに妹を振り切るため全力で走つた。途中、自転車で兄を追い抜こうとした妹を振り切るため前もろくにみずに走つたらマンホールに落ちたのは秘密だ。

* * * 8月12日 AM 08:00 鳳第二高等学校

SIDE 小鳥羽雅人

「まーさーと♪」

底抜けに明るい声と共にスライドする扉。鈴を転がしたような声はそんな騒音さえないものように聞こえる。その透き通る声の持ち主を察して僕はただでさえ落ちている気分を余計に落とす。

ススハラ
鈴原ゆづの登場と共にクラスにまばらに集まっていた同級生の視線は二つに注がれる。一方は鈴原の友人や、その他の女子が人気者

の登場に挨拶なりなんなりする視線なり言葉。そしてもう片方は…

「女装してる？」

「するかヴォケエ！」

僕と鈴原の仲をよからぬ見解ももつ男子と女子だ。

（ああ、すずちんとまーちゃんの絡み…！）

（眼福！！この世に産まれてよかった！）

（美少女×女装男子ハアハア）

（俺、いつ死んでもいい！）

ピクリと、聞捨てならない言葉に僕は反応する。

「まで、僕のどこが美少女だ！」

「えー、かわいいよ雅人？」

「男に言われても嬉しくない！ 当然、女子も！」

そう、鈴原が女装“男子”扱いなのに対して僕が“美少女”ということだ。鈴原も僕も戸籍上どころか肉体もれっきとした男である。なのに、鈴原は恥ずかしげもなく女子の制服を着籠み毎朝登校しては同じ言葉を僕に投げかけてくる。

その度に同性（だんし）から欲情の眼差しで見られてはたまったものではない。

セーラー服を翻しながら鈴原は僕の腕をつかむ。

「雅人の分も用意したんだよ。着替えようよ」

「僕を君と同じ趣味にするな！」

僕にそんな趣味は微塵もない。それどころか子供のときから女の子と間違われ、父さんが女物の服を買ってきては着せられ。そうやって騙されて着てるから親戚にすら女の子と間違われる始末。小学校に上がってから自分が今まで騙されたのに気づいたが、その黒歴史は確実に僕のトラウマとなっている。

それが今でも小柄を馬鹿にされたり、童顔を女顔だと罵られていればいい加減に我慢の限界である。

「雅人、男装はよくない！」

「そうだ！ 正気に戻れ！」

お前らが戻るべきだと思う。誰もが鈴原みたいなのではない。

このクラスには本当に嫌気が差す。私立だからと遠慮せずに聖涼に通っていればもっと分別のできるクラスメイトになっていたろうに。僕の学のなさが嘆かわしい。全国から集まってくる聖涼なんて僕の学力では元々は高値の花だ。いまさらグチグチ言っても仕方ない。

井口イクチと向井ムカイ。何時もの2人が僕と鈴原に近づいてくる。

「うーっす」

「相変わらずだなあ……」

「おはよっ、向井口」

2人をまとめて呼ぶとき鈴原はいつも省略をする。当初は「こんな奴とコンビを組みたくない」とか「一緒にするな」と「わめいてはいたが、今ではもう慣れたようだ。多少は夏休み明けも相変わらず

だなどといった引きつった笑みを浮かべながらも我慢した。

鈴原にも悪気はないのをわかってるのだろう。

だが、僕は見過ごさない。

「井口に向井？　だあれが正気じゃないって？、男装をしてるって？」

さっきの失礼な言葉。流石に許すわけにはいかない。僕の殺気に気づいてか二人は肩を大げさに弾ませる。それにトドメを刺したのは誰でもない、鈴原である。

「もちろん雅人だよ」

嬉しそうに弾んだ声。僕は怒る気力すら奪われ頂垂れるのだった。

あれー、案外と家が危機的状況なのに、学校という環境は相変わらずらしい。安心していいのやらなんのやら。ただ僕は非常に慣れ親しんだ始業した学校の久々に再会するクラスメイト達を眺めてるのであった。

そして僕は、再会を分かち合うクラスに足りない何かを思い出した。そういえば朝はアレのせいではーっとしていて気付かなかった。ヤバイ。僕の直感がそう察する。チャイムまでもう時間はない。いつの間にか長身は3の針をさしている。うちの始業はやや早めで20分から。

いや、考えすぎだよな？

僕は窓から外を覗いた。

「どうした雅人」

「って、そっミコトいや美琴は？」

凍りついてる僕はそんな二人のやりとりを聞いてやる余裕はなかった。

わんわんと大声で泣きながら校門をくぐる少女の存在のことをすつきり忘れていたのは、確実に僕の落ち度であり、女顔を馬鹿にされるよりも憂鬱な出来事だった。

【1・3】空想幻視

井口小太郎、向井広見は僕の友人だ。付き合いは長くて小学校の時から。元々は開拓地であつた鳥栖深は古都宮が多額の出資をしているが学校の数はあまり多くなく小学校は3校しかない。その時から“彼女”と同じく、同じクラスが長く続き同じ学校が今でも続いている。クラスを見渡せば懐かしい顔だつて多い。特に高等学校にいたつては特に偏差値も高くない公立高校であり、名門の聖涼や男子学生の高値の華である結咲女子学園しかない。

結女はいわばお嬢様学園で鳥栖深在住の女子なら憧れの学園である。その所為か、鳳第二には頭のよろしくない男子が集まっている。勉強ができれば聖涼へ、憧れのお嬢様の仲間入りなら結女へ進学が主。鳳第二は非常に賑わいのある学園だ。言うなら一般人の集い。悪く言うなら無個性の馬鹿たちしかない。

井口は眼鏡の位置を微調整しながら、向井は興味がないのか机に倒れ伏せながら寝ていた。向井の事情を知ってるから何も言えないものの、フォローの上手な向井が夢心地なのは辛かった。

「うえーん、私なんかより他の女の子がいいんだあー雅人わああ」

そうやって泣きじゃくる幼馴染をあやす作業は本当に大変だつた。篠目美琴は昔から僕についてまわる泣き虫だつた。少しでも僕が離れると追いかけては泣いてしまう、それが高校生にもなつて治らないのだから大概だ。でも、彼女をあやしてしまう僕も僕なんだと思う。

というか他の女つて誰だ。

「他の女なんていないよ、朝にちよつと立て込んで考え事をしちやっただ」

先程いったように、鳳第二は圧倒的に男子の比率が高い。このためクラスにいる女子は男子にとつては青春を共に謳歌できるかもしれない貴重な存在なのだ。非常に不愉快ながら僕もその一角にいるのはクラスの反応を見てのとおり。普通の男子だったら今すぐ血祭りであるが、耳を済ませてみる。

（くうう、やっぱいいなこのクラス！）

（美少女2人の絡みつてそそられるっす！）

（ゆうも捨て難いが、幼馴染って定番だよな！）

このように非常に僕のコンプレックスをズタズタに引き裂いてくれる。もうツツコミをいれることにすら疲れた僕は何も言い返さない。それはもう夏休み前だけで経験している。ちよつと睨み返しただけで奴らは頬を赤らめやがった。もう見てやるもんか。僕はそう決心した。

そんな外野なんかよりも今は琴ちゃんだ。彼女を下手に泣かしたままでは余りにも危険だ。井口の視線はもはや天井を見ている。HR開始までもう時間はない。このままでは……！

嗚咽が次第に激しさを増す。僕はちらりと頼りたくない友人。鈴原を見た。鈴原は意味あり気な笑顔を浮かべる。その表情はたしかに物語っているものがあつた。

（ぼくが持ってきた制服着てくれる？）

こいつが持ってきたのは明らかにセーラー服であろう。なんの気の迷いかうちの制服は短いし校則で制限などされていない。ほとんどが男子なのだから仕方ないと言われればそうなんだが……、僕には深いトラウマがある。幼いときに親父が執拗に女装を共用した。男物も女物をあまり理解してなかった幼い僕は周囲の「似合ってるよ」という言葉が嬉しかった、しかしそれが女性用の服だと知った時から僕はそういったことを強く拒否し続けた。

しかし——っ！

揺らぐ。揺らいでいく。僕は役に立たない井口を今度盗み見る。我関せずと携帯をいじっていた。

「ひぐつ、えく……へへ」

あつ……。僕の緊張の糸はついに切れてしまった。スイッチが入った。

「雅人も放置プレイが好きなんだからあえへへ」

鼻声なのに語尾が弾んでる。顔は蒸気し涙に濡れた目は熱を帯びて僕を見つめ返す。こうなってしまうたら最後。僕はガクリと大げさに項垂れる。どうして僕の周りにはまともな人間はいないのだろうか。HRが終わったら保健室に直行して薬を貰おう。

妙なくらい身体をもじもじさせる。くねらせる。それはもう芋虫とかのレベルのうねり。あまりのうねりに周囲の机がやや広がった。主に僕と琴ちゃんを台風の目とするように。うん、素直に認めよう。ドーナッツ化現象だ。

僕はすかさず隣の席の石崎君を見た。出席番号で並べられてる今、井口が現実逃避してる中で頼れるのは隣の席の石崎君だけだ。僕の向けられた視線に石崎君は戸惑いを隠せない。ハッキリするくらい顔に文字が出てる、「そこで俺に振る!？」と明らかに迷惑をしている顔だ。しかし、琴ちゃんで迷惑してるのは僕もなんだ。いくら僕が制止役だからってタイミングっていうものがある。

正直、自分の事で手が一杯だ。むしろ井口や向井、鈴原に悟られぬようにと、何時ものように振舞ってはいるが限界もある。まだ僕のコンプレックスをいじられるのは僕が気にしない振りをすればいいだけだ、しかし琴ちゃんのスイッチは明らかに『僕に降りかかる災厄』なのだ。この問題は僕がなんとかするしかない、その度にも面倒な役回りをしてきた。

過ぎるのは今朝の会話。父さんと母さんの奇妙なやり取り。恐らくこれから何かのために家を開けるであろうことは家族として僕は理解しているつもりだ。だからこそ今後の生活や様々な面で考えたことはあった。だからこそ今、彼女に構うのは荷が重い。

「言ってくれば縛られるのにい」

妙に熱っぽい声でとんでもない事を言ってくれる。僕にそんな趣向は存在していない。

(くう、俺も縛られたい!)

(まーちゃんの頼みなら死ねる!)

(むしろ蹴ってもらいたい!いろいろと!)

……もっ、なんか……さ?

「鈴原、頼める？」

「雅人、わかつてるよね？」

……どこからか取り出したのか、某学生服専売店の紙袋を持った鈴原がこつちを見てくる。恐らく、中身は言う必要はないのだろう。本当に今更だけのこの学校にして間違ったと分かった気がしてきた。そっぴい夏休み前に向井が言ってたっけか？ 『お前と鈴原のようなのがいるから、半ば男子校の鳳校男子諸君は男女でも欲情するくらいたくましくなった』と。正直に言えば半信半疑ではあった。

なんかもう、この納得したくない現状を見ると、流石に頷くしかないと思う。

鈴原の目が痛い。僕が頷き了承してるのを待ってるかのようだ。多くは触れないが琴ちゃんも熱でうなされてるのか一人で睦言を延々と交わしている。健全な男子の耳にはあまりよろしくない戯言だ。度々、僕の名前が口に出るがそのような事実は一切ない。

HRまで時間はない。非常に言いたくないが担任がめんどくさい人物だ、ここは鈴原に任せよう。僕があれこれ考えてる間に琴ちゃんの妄想はヒートアップしている。背に腹は支えられない。僕はしぶしぶ頷いた。数人の男子がガッツポーズしたのが分かった。そうか、あそこらへんが主に僕を邪な目で見てる連中か。

外靴に画鋲だけで済むと思うなよ？

「わかったよ……」

「おっけ」

よほど嬉しかったのか、可愛らしく（男に言うのも変だが）ウイ

ンクした鈴原は妄想の世界に入り浸ってる琴ちゃんの遠くからも見てわかる2つの山に——って!?

「なんでやねーん」

「あべっ」

なんでやねん。そう僕が小さいつぶやきは、教室の落胆や喧騒にかき消されるのであった。

その喧騒をすり抜け朝のSHR開始のチャイムが遠い遙か彼方から聞こえてくるかのようにだった。

「よし、そんじゃホームルームを始めるぞお」

切れ長い目付き、八頭身というモデル顔負けのスタイルに端正な顔つき。一般的に女性向けの強い容姿をした我らが担任が、突如として天井から出てきた。白衣を靡かせ上手に教卓の前に降りると眼鏡の位置を直しながら答えた。

ヤツカシヨウスケ

八塚翔介教諭。担当は生物であり教室でもくわえタバコをやめないヘビースモーカーである。苦情に來た御婦人をその容姿で落として、校長先生すらも逆らえないというとんでもない先生である。理事会でも物議を醸したが、御婦人が多く、彼がクビになったことはない。

「……」

その非常にいろいろとめんどくさい先生が一瞬、固まった。ポロリと教卓にタバコが落ちた。視線が僕に突き刺さる。

「そうか、結局はなんだかんだ言ってもお前と鈴原は同じってことか」

「ふふふ、そうかついに僕はあの変態と同じ領域になっちゃったんだ……は、ははは」

> i 3 2 3 3 0 — 4 0 6 5 <

力なく笑う僕。自分の瞳が濁っていることが分かるくらい、人として色々と大事な物を置き去りにしてしまったのかもしれない。なんだろうこの脱力感、それにむず痒さ。スースーと風通しが良くなると落ち着かない。学ランから一転してセーラー服に化けた僕はこれからの全校集会に酷く不安になるのであった。

公開処刑に赴く囚人のような気分だ。

「大丈夫だよ雅人、似合ってるから！」

鈴原のいらない励ましが教室に響く。僕は大きく肩を落とす。僕は斜め後方にいる琴ちゃんを見る。琴ちゃんは（スイツチは入ってないようだが）鼻血の山を築きあげていた。琴ちゃんも僕も鼻炎や花粉症などのアレルギーを持っているから結構必需品なのであるが、もう机が鮮血とティッシュに埋もれうずたかく山を作っていた。琴ちゃんには今日はレバーを焼いて食べさせよう。

いや、顔が白い！？ もち肌で日焼けをあまりしない琴ちゃんだけどもより白くないか！？

「せ、センセ!？」

「んー、篠目なら大丈夫だろう?」

思わず呼んでしまった先生はあまりにもずばらだった。夏休みを明けて久々に会った僕に(そりや目立つが)コメントをしたというのに未だにクラスにはノーコメント。琴ちゃんに至っては見捨てたのかなんなのか、もはや樂觀視も酷い。

流石に琴ちゃんが変態で悩みの種だからと言って幼馴染を蔑ろにするなんてできっこない。いくら自業自得な上に人の女装を見て鼻血を吹き出して止まらなくなったとはいえ幼少期、物心つく前からの友達だ。流石に出血多量で青白くなってるんだ、労わってあげたいのが本心。

「いえ、流石に心配なんで保健室に連れていきますよ」

「んー、待て待て」

僕を制止する担任をジロリと睨みつけるような形で見る。担任は軽薄に笑いながら、おもちゃをみつけた少年のようないたずらっぽい顔をしていた。先生のこうゆうところが人気を集めてるのかもしれないが、時にはそれが頭に來ることがある。

例に漏れずカチンと來た僕は目で促す先生の視線に負けて渋々と座ることにする。それを確認すると先生は大きく息をすってから教室を見渡す。

「うん、夏休み明けだってーのに誰も遅刻なんてしてねえな! 休み明けだってーのに偉いぞデメエら」

そうやって切り出すのは卑怯だ。僕は不満を口に出さず口が達者な先生の話聞き流すことにした。どうにでもなれという半ば投げやりな感情と、先生の話術によって活気を取り戻すクラス。そこには僕の女装によって気まずいものや欲望やらで統一性を失った教室の空気を取り戻すものだった。

卑怯だ。

父さんや母さんにしても、先生にしても大人というのは卑怯だ。『大人は子供より正しい』ということを知っているんだ。どうせ先生は琴ちゃんを運ぶついでに全校集会をサボろうとしていた僕をどこかで見抜いていたのだろう。だから、そんな事はさせない。だから、これはすべて先生のシナリオであって――…。

卑怯だ。

父さんのやってることだって、不満だらけだ。

濁った思考に明け暮れる僕に隣の席にいる石崎君が突っついてきた。現実に戻される僕、援護をしてくれなかったお影でこんな格好をするハメになってしまった、裏切り者の石崎君をやや冷たい目で睨む。申し訳なさそうな顔をした石崎君（彼女持ち）は僕にしか聞こえない程度の声量で話しかけてきた。

（聞いてたか、小鳥羽？）

（聞いてたって……？ なにを？）

その言葉の意図も察しようとしてずに僕は不満を露にする口調で言う。石崎君は多少、申し訳なさそうな顔をして頬を軽く指で掻いた。多少は悪いと思っているらしい。もう少し、声音を緩めてもいいか

もしれない。ゆっくりと深呼吸して感情をコントロールする。

（さっきは悪かった！）

（それより、『聞いてたか？』ってなにを？）

この話題はあまりいい方に転がらない。僕が話題をそらすと『助かった』という顔を石崎君は出した。すると何時もの気さくな柔らかない表情に変えて経緯を話し出す。その話を一言にまとめると単純なものだった。

（転校生？ こんな時期に？）

（ああ、そうらしい）

意識的に教室全体に耳を傾けると、ちらほらと転校生について話をしている様子が伺えた。夏休み明けのこんな時期に転校？ 真相は謎ではあるもののどうやら嘘ではなく、しかもこのクラスらしい。次は予期せぬ転校生の登場に浮き足立つクラスを取り仕切る先生が口を開く。

「わけ合ってうちのクラスに2人加わることになった。喜ベガキども！」

予想外の展開に教室は異常な熱気に包まれた。そして先生の馬鹿騒ぎの許可に教室はさらに沸き上がる。僕は隣の彼女持ちに視線を向けると、石崎君も『同じクラスに同じ時期に転校生』という不可解な現象はよくわからないらしい。また始まる学校という空間に新たに加わる刺激は、格別なものだった。

より一層、まとまりを失った教室。何時もの先生なら上手いこと言って教室を落ち着かせるのに、何も言おうとしない。

ちらりと先生が僕を見てきた。

「——っ!!」

そうだ、今までなんか普通にしてきたけど僕って女装してるんじゃないか!! とても余計な事を思い出してしまった。むしろ忘れていたかった、しかし、思い出してしまったものは仕方ない。このトリ校の雰囲気、特に鈴原のせい（不服ながら僕も含むらしい）で変態の巣窟となったこの教室に、異端分子——転校生をいきなり入れていいものだろうか？

……いい訳がない。

しかもうちのクラスの連中は頭が溶けているのか、これが普通になっちゃまっている。

「ちょ！ 先生!!」

僕はこんな変態の巣窟の中に純真無垢な転校生をいたくない一心で叫ぶ。しかしm教室の喧騒にそれはかき消される。

「よし、入ってこい」

扉を開け放ち、先生は喧騒の中でも聞こえの良い声で呼びかけた。2つの唱和。それも、喧騒の中でもしつかり僕の耳に届いた。教室に“彼女たち”が踏み入れた時、世界が変わったようだった。静まり返る教室。パツと浮かんだイメージは赤と白。

ひとつは赤々としたアマリリスのような自信と気高さ——強い「

誇り」を持っているような凛とした女性。その少女に続くように、ユーチャリスのように白い花が似合うような少女。その花ことばの通りに「純真」さが垣間見る——無垢な少女。どれも僕らと同年なのだろうが、次元がまた違った。

母親の花好きが講じて、ついつい花で例えてしまったように、それくらい彼女たちが目を引くほどの美人だった。文字通り言葉を失った僕たちは彼女の挙動に目を奪われる。先生が視線で促したのか、「アマリリス」が一步前に出て口を開いた。一本にまとめられた赤い髪が僅かに揺れる。

コウサカユカリ
「紅咲紫です。今後ともよろしくお願い致します」

多少きついと思うかもしれない高圧的な語調。しかし、自信にあふれる彼女らしい言葉だった。簡単にそれで済ませると一步下がる。僕たちは拍手することも忘れて次の「ユーチャリス」は酷く緊張しているのか、上ずった声で「はい！」と、一步前に出た。

「エヴァ・クレントスです！ あ、えつと……紫ちゃん共々よろしく願います！」

口早に、何度か噛みそうになったもののエヴァさんは言い切った。しかし、彼女は紅咲さんのように下がらずに遠慮がちに教室を見渡してから口を開く。思わず見とれてしまう美貌の転校生たちを賞賛し、馬鹿騒ぎする男子もおらず、周りを見渡せば女子を含めて間抜けのように口を開けたままだった。僕もその内のひとりであった。

静まり返っている教室に不安が募ったのか、エヴァと名乗った少女は助けを求めるように、隣の赤い髪を一本に束ねた少女——紅咲さんに助けを求めるような目で見える。モデル並みに背のある紅咲さ

んだから自ずと小柄な彼女は上目遣いになる。純白の羽毛のような天使の羽のような。軽く柔らかそうな彼女の長くて白い髪がまた揺れる。

——赤い髪？　白い髪？

あもわず例えた赤と白のイメージ。そして赤い花と白い花。アマリス　ユーチャリス人並み外れた容姿。僕の目は自然と首筋に向かって伸びた。その過程で紅咲さんと目が合う。一方的に睨みつけられてるような、そんな感じ。彼女の視線を追従する形でエヴァさんも此方を見てくる。こちらは何かに驚いた様子。

だけど、僕が注視していたのは首。金属製のチョーカーである。見覚えがあるなんてレベルじゃない、日常的に見ている

紅咲さんはエヴァさんに並ぶように一歩踏み出してから、僕に向かって言う。クラスを見渡すわけでもなければ、隣や前の席でもなく、その瞳に非難を多分に含んでいて視線だけでも思わず殺されてしまうのではないかと身震いするほど。

「私たちは——」

「あつ——！！」

口を開いた紅咲さんに割って入るように復活した（あの出血量でどうやって復活したかはわからないが）琴ちゃんが2人を指さしながら勢い良く立ち上がった。その表情は驚きを隠せないもので——。

「今朝、雅人の家に入ってた人たちだ」

『うえーん、私なんかより他の女の子がいいんだあー雅人わああ

あ』。そう、琴ちゃんはHR前に叫んでいた。あれは琴ちゃんの妄想の中の世迷いごとをかと思っではいたんだけど……まさか、そういうことなのか……？

「元所長命令により、小鳥羽雅人さんの身の回りの世話をすることになったものです」

——TTナンバーを表す銀のチョーカー。そして、僕の名前と父さん——つまりは所長の命令。それではじき出された回答は、恐らく僕にとっては余計に頭を悩ますことになるものだ。なるほど、料理も家事もほとんど母さん任せでろくに出来ないのは折り込み済みだったって訳か。

軽蔑や侮蔑の眼で睨んでくる紅咲さんに耐えかね、僕は己の身なりを思い出した。

「つて、えええ！？」

『な、なんだつてええええ！？』

僕の声、やつといろいろ置き去りにされていたクラスメイトたちは戻ってくると同時に見事な唱和。それに遅れて遙か後方の席では向井がダルそうに身体を起こす。

「……はて」

間抜けな向井の言葉が静まり返った教室にどういう原理か、木霊するかのようにだった。

「みんな弁当忘れたの？」

「広見……、前だ前」

井口の呼びかけに眠気眼をこすりながら向井は現実を見始める。

「えーっと……………って、なんで女子の制服を来てるんだよ雅人！？」

「まず最初に気になるのはソレか！？」

向井の言動に思わず僕はツツコミをいれてしまう。セーラー服で小鳥羽雅人という名前に反応してしまう。それに気づいた僕はブリキのおもちやのように首をきしませながら転校生二人を見る。そりゃ僕を惨殺するような勢いで睨む紅咲さんと、新種の発見をしたように可愛くはにかんでいるエヴァさんがいた。

——もう死にたい。

「え、なにこの空気？」

お前は愛するべき馬鹿だよ向井。

「つまりだ、雅人は己の真の姿を晒しちまったわけだ」

「オハヨー向井」　ホラホラ、可愛い転校生だよ？」

井口に鈴原。お前らは特に覚えてろよな。べつにこれは真の姿でもなんでもない。ついに状況を理解した向井は申し訳なさそうに僕を見る。その後に転校生の2人を見ては、僕に視線を戻す。そのやり取りだけで僕らの間には話は成立していた。

向井：似合ってるぞ雅人

雅人：ああ、あれが件の転校生だ

向井：女子からも求愛されてるのか？　GLにならないのか？

雅人：フォローとかしてくれ！

向井：安心しろ、俺は雅人のが可愛いと思うぞ。

いいや、成立なんししてなかった。

「話がかみ合つてねえよ向井イイ！」

「え、マジ？」

お前は僕が何を問いかけてると思ったんだ。しかも軽く鳥肌が立ってしまっている、なんかさりげなく遠まわしに男に告白されたような気がする。

「待て広見、雅人は俺のだぞ」

「小太郎……！」

なに井口も立候補してんだよ！？

「やめろ！ 男2人で男を取り合うな！」

「ハハハ、なんか雅人『やめて、私のために2人で争わないで』って言ってるみたい」

鈴原の可愛らしいソプラノ声で僕の真似をする。僕はそんな事をそんなニュアンスで言っただけでもない。転校生なんかお構いなしに何時もの空気を作り上げる向井口の2人。何時もの笑いが飛び交うクラス、そしてなぜだか『俺も俺も』と数を増す男子。

「だ、ダメだよ！ 雅人は私の調教主なんだよ！」

琴ちゃん、僕はそんな役になった記憶は一切ない。

「ハハハ、結構結構」

今まで沈黙を守っていたクラスが先生の挙動で静まり返る。なにをしてもかっこよく決まる紅色男児こと八塚翔介教諭が教卓を強めに叩くと、つい先ほど落としたタバコが軽く宙を舞う。その軌道を追うこともなく、自ずと生徒は自主的に着席をする。それに満足してか先生は白い八重歯を見せつけながら笑顔で言う。

「そんな訳だ、転校生2人の世話は小鳥羽がやれ」

「せ、先生！ 僕も何がなんだかさっぱりなんですけど」

狼狽える僕。それもそうだ、僕の予感はおそらく的中してるし八塚先生のことだ、彼女の言動で推察できないはずがない。彼女たちの正体や僕の両親に至るとこまで。もしかしたら現状の僕よりも詳しく事情を知っているのかもしれない。たしかに僕は彼女に聞いたことは山積みだ。

だからといって、紅咲さんは僕を明らかに勘違いしている、エヴァさんは知らないけれども流石に最初の出会いがこんな女装すがたなんて印象が悪いだろ。明らかな敵意が剥き出しな紅咲さんならまだしも、上手く表情が読めないエヴァさんが非常に怖くてたまらない。

思わず、固唾を吞んで先生に懇願するように見つめる。

「でも、彼女たちはお前の世話するためにわざわざ来たんだろ？ 理由はよくわかんねえが、お前がやるんだよ小鳥羽。それに、お前が一番扱いをしってるんじゃないかあ？ なんだって篠目をメロメロに調教したフィンガーテクニクの持ち主なんだしな。ハーッハハハ」

高笑いで返された。非常に不満そうな紅咲さんと、純真無垢な笑顔を振りまくエヴァさん。僕はため息を捨てて立ち上がり言う。

「鳳第二高等学校1 - F所属出席番号9番小鳥羽雅人……れっきとした男子です！」

非常に、男子には腹の底から力入れて言い放った。目を丸くするエヴァさんはちょっと待って欲しい。紅咲さんの『死ねよ変態』な視線はあまじんで受けるがそんなキョトンとされても僕は困る。クラス中からヒソヒソと不名誉な烙印やら、僕の男子宣言を真っ向から否定したりやら、なにかと酷い言われようだが気にしない。

「よろしくお願いしますね、雅人さん」

「……………」

紅咲さんから返事は貰えず、エヴァさんはこれでもかってぐらい汚れをしない笑顔で返された。

決して、何かが始まったなんて思わない訳がなかった。

朝の出来事、そしてこのHRでの出来事は偶然では決して片付けられないから。

だから、何かが始まればいいなあって、この時の僕は思っていた。もう既に始まっていたことの知らない僕は、漫画やアニメのようなこの出会いに、

心のどこかで胸を弾ませて、これからの2学期に胸を弾ませていた。

それがどんな物かも知らずに、何も知らない子供のままだった。空想を幻視する子供のように、迫ってくる現実なんかに見向きも

してなかった。

—Masato Kotoba in the NEXT WORLD
”ZERO”—

The world which is kind to the
decided children.

The children who pass to and
from between GOD and the person?
Remember it.

Then, face the front.

The world is indifferent to you.
But, certainly:

”The person” is holding out a
hand to you.

”The person” will lead you to
the sunny place,

The children who pass to and
from between GOD and the person.

I praise you like this.

”GOD HALF”

That is an appointed popular
name.

Find your happiness.

オレと死神 雅人編

God's child and appointes boy
s }

【1 - 4】空想幻視

霜月小雪^{シモツキコユキ}は3年の生徒会副会長である、霜月小梅^{コウメ}先輩の妹だ。小梅先輩は弓道部の方で魅夜と面識があるため、一応オレも顔見知り程度の面識はあった。しかし、我がクラスにその妹である小雪姫がいた事は入学して一月くらい気付くことになった。

もともとオレは、魅夜やレナと違って交友範囲が狭い事と昔の素行の悪さがいい具合に噛み合って、クラスで近づくことは遠慮した人って立場である。そこまで人と話すのも得意な方でないオレはありがたいことではあるが、最近汚名返上、名誉挽回。それなりにクラスに打ち解けてこれたと思う。

それもこれも、小雪姫と関わるようになって彼女の取り巻き、その他もろもろの男子と会話する機会に恵まれたからである。その過程でレナとも最初は教室であつても挨拶をするような関係ではなかったが、見かけては声をかける程度の仲になった。元より、とある深夜の出来事も関係改善に役立ったのかもしれないが、クラスで男女隔てりなく仲の良い小雪姫とレナと話すようになって、めまぐるしいものがある。

その為に、今朝はこんな人垣が出来てしまう結末となった。

「おいおい、その怪我^{ギブス}どうしたんだよ」

「うわあ、大丈夫？ 雨宮君」

今朝、とあるクラスメイトの乗る車に撥^はねられたオレ。ダメージは殆ど流したものの頭を守った左腕には相当な負担があつたためか、折れていたことが判明。その車に同乗していた執事のじいさんは、

かつては軍隊にいたらしく、応急処置をして貰った訳である。

何故、車にギブスなどを積んでいたのか聞くと、少し目が怪しく光ったので詳しくは知らない方が為のようだ。思えばバンパーはオレ一人ぶつかったには大きい歪みであつた気がする。

「心配するほど酷くねえって」

何回だろうか？ もう嫌になつてくるクラスでの似たようなやり取り。正直、飽きたのもあるが仕方ないことだと腹をくくる。これが夏休み前であれば数度のやり取りかもしれないが、長期休暇明け、久々に会えばギブスならばそりゃ焦る。

しかし、どうして骨折をしたのか聞かれたら困る部分がある。小雪姫の車に撥ねられた、それも急所をガードするために出した腕が運悪く衝撃でぼきと逝つてしまった。どれも言いにくいものがある。（すぐに止まったため相当速度を落としていただろうが）車と接触したにしては随分と行動できたもんだ。言うなら人並み以上の動きをしてしまった訳で、一応一般人で通してるオレにはなんとも表現がしにくかった。

「ちいっと、遅刻しそうだったんで焦つてたら階段踏み外しただけだって」

「うわあ、魅夜の旦那様あんがいドジねえ？」

オレは魅夜の旦那なんかではない。しかし、幼馴染というのはクラシックには面白い遊び道具なのだ。だからこういつた時の対処はオレらの中では決まって自爆ネタに走ることが多い。といつてもオチは何通りも決まっている、その代表例が『あんた同棲してる彼女いるでしょ』である。

どういう訳か地元の人間を優先している聖涼だからこそ来れたような“それなりに”の奴が、内地の名門中学校のボンボンや勉強しかり柄のない奴らよりも優遇されてるのは事実であった。それゆえに非常に倍率が高くはあるが、見かける顔に知ったものは多い。だから、オレとクレアは既にクラスでは公認というわけだ。

ただし、クレアは受験に失敗して以来、働きもせず飲んで食って遊んでと、パラサイトのような生活を送っている。学業に励む傍ら非常にド突きたくなるが押さえ込む。思い出すだけで今日の晩飯に奴の苦手な納豆を出したくなる。

つと、しばらく思考が飛んでいたか。変に思われても面倒だ、いつもどおりに当たり障りのない自爆ネタを構築させよう。魅夜がどう突っ込みやすいか、幾通りの思考を張り巡らせる。

「魅夜の野郎が胸で受け止めてくれたらケガはなかったんだがな」

「あー、ダメだよ旦那？　魅夜はナイチチだから」

オイ、お前がツツコミを入れるのか。ここは魅夜が『別に同棲してる訳じゃないんだから無茶いわさんな』と、さりげなくオレの自爆ネタを回収するタイミングだぞ。しまったな何時もの冷やかしのような反応を楽しむ茶々ならよかったものの、ターゲットはオレと魅夜じゃなく、オレだけであつた。ここで魅夜に救済を求めても仕方なかった訳だ。

ここは色ボケて見せるべきか？　ああクソ、こうやって一々キャラをつくらないとやってけないのだから集団というのは本当にめんどくさい。かと言って変な空気にしてしまうのも頂けないものがある。それもこれも確立されてしまったキャラを手放すのは惜しいか

らだ。

集団生活をする中でキャラは重要な役割を果たす。しかし、そこでマイナスを付けすぎるのは良くないことだ。そのバランスを保つために男子女子問わずに身なりに気を付け、相手と自分を持ち上げるバランスを考える。相手の反応を気にして行動をするのだ。

数秒にも満たないが思考を繰り広げる。魅夜は自分の友人たちと仲良くおしゃべりをしている。このクラスメイトはたしか魅夜とよく話をしてるのを見かける、なんといったか思い出そうとするがなかなか出てこない、あまりしゃべる機会はなかったのは覚えている。

しかし会話の姿勢からオレの事で魅夜をからかっていたんだという予想は付く。

「いやいや、脂肪だろ」

「アハハハ、そういえば最近、魅夜ったらお腹のあたりの肉が落ちないって言ってたね」

聞いてて心地の良い声ではある。明るくハキハキとしゃべる。オレみたいな陰険でうたぐりぶかい性格よりはマシな人種だ。恐らくクラスでも人気者なのだろう、華が咲いたように明るく、語っている。オレは彼女の言葉を話半ばに聞いては、適当な相槌で済ませる。

いい加減、彼女もわかってるんだろうがオレにはクレアがいるという事を告げなければならない。何よりもクラスで変に二股だの騒がれればクレアに申し訳ない。そこだけは誠実に守りたいラインだ。オレの怪我のことで困っていた連中も彼女との会話に花を咲かせる。

途端、右肩を指で叩かれる。オレは自然に叩かれた方向に顔を向

ける。頬が軽くゆがむ。オレはその元凶たる指先を話すために腕とをとり、あるべき位置に戻す。意識せずに向いてしまったのを今更後悔してしまう。オレの右隣といえばコイツしかない。霜月小雪——小雪姫だ。

文句のひとつやふたつ言ってやろうかと口を動かそうとしたとき、小雪姫が自分の口に指先を1本当てた。よくあるジェスチャー、静かにしろと言いたいのだろうか、なにやらあまり聞かれたくないらしい。不本意ながら肯定するように頷いてみせる。

（クレアの事を言っちゃダメよ？）

（はあ…？）

よくわからない忠告である。大半のクラスメイトはオレに恋仲にあたる人物が存在しているのを知っているはずだ。つい間抜けな声が聞こえない程度の声で漏れた。小雪姫は大して気にした様子はない。どうやらこの程度の声量なら許可をしてくれるらしい。オレは続ける。

（どういうことだ、小雪姫？）

（あの娘は貴方に気があるのよ）

その言葉を理解するのには数秒かった。思考が右往左往縦横無尽、あちこちに行ったり来たりを繰り返した為にろくな判断をすることが叶わなかった。つまり、その言葉通りなら、そういうことなのだろう。

（それを知っているからあの娘の友人たちは、応援すると言いながらクレアの事を黙ってたのよ。）

（それだからこそ、牽制するんだろ？）

小雪姫の言葉を遮る形でオレは言う。

（それは男の傲慢）

（だからって、）

（マンツーマンならまだしも、大勢の場よ？）

オレの言葉を遮った小雪姫は冷徹にその言葉を吐く。これではオレも黙るしかない。確かに、ここでもうのも気の毒だ。わざわざ友人たちが傷つけないように黙っていた物をオレの傲慢、いいや、オレひとりの傲慢でないにしろ、そこまでする必要があるのか否かだ。この場で直接言うにはあまりに酷、気を回してやれとの事である。多少、迷うのもあった。いつもなら決断出来ることも思考が鈍る。どう切り返していいのか切っ先が震えているからだ。これでは断てるものも断てれない。

……傲慢、か。

ふと、思い出さないようにしていた昨夜の出来事が蘇る。

『深く関わり合いにはなりたくない、けど自分が納得いかないから知りたがる。知ってもその場で満足して、そこから一步を踏み出そうとしない……傲慢だよ雨宮君。』

（——なんだってんだよ）

（その姿勢、よくないわよ？）

軽い舌打ち。決して小雪姫に向けたものではなかったが、悪態をついてしまったととっても可笑しくはない状況だった。

（悪い、考え事してた）
（そう）

だから適当な謝罪を入れておく。オレはいい加減、ため息を吐くと視線を人の机を囲む取り巻きの排除に取り掛かる。そもそも黒板の中心に位置する座席、多くの席の方々に迷惑を被っている。そろそろHRも始まるのだから丁度いいのかもしれない。

「つーか、心配いらねエから！ どいたどいた」

声を少しだけ張りながら、右手でしゅしゅとあっちいけというジエスチャーを送る。何人か勘のいい連中は壁時計をみるや否やもうこんな時間かと席を離れていく、数人と似たようなやりとりを交わし（同じ教室にいるのに『またな』というのには毎回返事が困る、ツツコミをするのも面倒なので、適当に返すことにしているが…）、最後には彼女だけが残った。

オレを魅夜の旦那と呼ぶ割には、オレについての事情はあまり知らないようだ。それは彼女の友人がひた隠しにしていたと小雪姫は言っていたな……、よくまあ、天然なのかなんというのか、乙女心つてもんは複雑なんだな。妙に取り残された彼女は何かを言いたげだった。

「もう先生来るけど、何かしたか？」

別にタイミングは今じゃなくていい。無駄に期待させるのも悪い、今度はこの娘がいる場面で、そしてこの娘が主体に話が進んで居ないときにするべきだ。さりげなく告げる『恋人がいる』と、場面はいつでもいい他の生徒がオレと魅夜をからかつてる場面ならいつだ

って……。

「えっと、魅夜がいるから心配ないと思ってたけど……、ノート大丈夫かなーって」

ん？ ノートだと……？

……利き腕に目が行った。ギプスをしている、右手も器用な方ではあるがノートを書き親しんだ左手よりは不便なのは必須。なによりもオレは板書された内容の他に要点など先生の言葉もメモしている……右手で書ききれぬ自信はない。それに、紛いなりにも名門高校、板書される内容は濃い上に多い。

まずい。そう思った。何よりも、ノートの件を忘れていたのが露骨に現れた。ちらりと小雪姫を見る、彼女は興味がなさそうに前方の黒板を見ている、どうやら『馬鹿』とオレを評価しているようだ。さてはて、どう切り返したのか……。

ここは小雪姫に頼もうとしていたと切り返すか？ いや、小雪姫なら断つてくと思う。そういう奴だ、それを証明するにはこの悪戯には過ぎた左腕が証明している。あんまり答えを遅らせるわけにはいかないか。

「ああ、気を遣わせて悪いな。今朝に将の奴にメールして頼んだんだよ」

咄嗟に出た言葉に満足する。将ならば事情を話せばノートをとってくれる。さすがに不完全骨折なので一月でくつつくそうなんだがノートをみせて写すんじや多大な時間を浪費することになる。書きなれない手で字を書くより将に頼んだ方が信用はある。何よりも魅

夜よりも字が綺麗だ。

妙な間については『気を遣わせて悪い』というバツ悪さでぬぐい
さることにする。それが相手をもつ点では必要なこと、そして彼女
の協力を拒むことは自分を持つこと。バランスを整える、彼女にも
自分にも悪くないように。

「そう、なんだ……」

先程までの威勢もなくしょんぼりした彼女。小雪姫の変な忠告が
なければこの誘いを受けていた、それは彼女にとって酷なことにな
る。小雪姫には感謝しておく必要はあるが気を回すのは骨が折れる。
オレは短く「悪い」と、言っと、「気にしないでいいよ」とだけ言
い残し、席に戻って行った。

くっだらねえ……。

今まで、思わないようにと思っていた心境が、頭の中で漏れてし
まう。今朝の事を反省して封印したんだが、この言葉はどうしよう
もないほどにオレに染み付いてしまったようだ。

「……及第点」

「あんがとよ」

小雪姫の採点は厳しいようだった。オレも乙女心つてのはくっだ
らねえが勉強不足のようだ。やるときにやらねえならやる意味はね
え……、まだタイミングじゃねえ……よな？

オレはふらりと立ち入り禁止の看板が下がっている扉を開ける。
清涼な風がが身体一面に駆ける感触は心地よかった。しかし、ひとたび歩き出すとコンクリートの熱はとんでもなかった。日陰にいけば随分と涼しいことだろう、オレは軽く見渡すと目当ての人物を見つける。目立つ銀髪に赤い長髪の男、それを立ち入り禁止でほぼ無人の屋上から見つけることは造作もなかった。

「よお、将に如月^{キサラギ}」

将は子犬のような笑みを作り、思わぬ登場人物を歓迎してくれたようだ。井塔将^{イトウ}、その童顔に騙されて淘汰された人間の数は数知らず。その策略は相手の心理の裏側を突き、必ず膝まづかせる悪魔のような面を持つ悪鬼羅刹、一部からは魔王とまで恐れられた人物だ。

うってかわり、如月はこっちを無視。相変わらず如月駿^{シユン}はオレに對して敵意のような物を持っている。これが荒れていた時なら喧嘩物である。その荒くれ者であるオレと如月を上手にセーブしているのが誰でもない、将本人だ。絶妙なタイミングでこれ以上のものはないという言葉で仲介をする将には時々、底の無さを感じ怖いと思う時がある。

この屋上だって将がどういったルートかは知らないが、得た合鍵で開放されている。

「カズは集会に出ないの？ 柴原さんが怒ると思うなあ」
「おめえらこそ人の事を言えんのかよ」

つか、この左手にはノータッチなあたり、将はもう情報を得て

いるのだろう。オレは日陰のある位置まで移動して夏の暑さと風の涼しさを体感する。その過程で自然と見上げた青々した空にはまるで真昼の月のように灰色の点が散っていた。雲もろくにない快晴だから嫌に目立つ。

鬱々とした感情が湧いてくる。今でも気にしてるのか？

あの時、レナの野郎も言っていた。確かに傲慢ではある。しかし、当事者になってしまったオレの場合、最低限の知る権利はあると思う。だから、めんどくさい。踏ん切りを付けないオレもオレなのであるが、やはり面倒ごとにはもう極力避けたい。

忘れること。それ幸か。

頭の中で結論を出すに耳になじみのある着信音が流れる。それが自分のケータイだと結論を出すのに時間を要することはなかった。初期設定のままだから最初は電話かメールか区別がろくにつかなかったが流石に一年近く使っていると、これがメールだということがわかる。

高校生になると同時、入学祝いということで魅夜の両親とお揃いで買ってもらった携帯はまだ真新しく、自分でもよくここまで丁寧に扱ってるなと関心することもある。在学中はすべて叔父さんたちが持つてくれるといったが、身内のいないオレだからといって甘えて好き放題という訳ではない、サイトなどの登録はせず、無用なオプションはすべて取り払った。通話とかメールとかそれだけあれば十分である。

同じ親会社の携帯ならなんでも通話やメールが定額な分、普段から連絡を取るような人物がクレアくらいしかいないので叔父さん達には遠慮する必要はないと言われたが、そこまで甘えるわけにはい

かない。そもそもこんな私立である聖涼に通ってるのも叔父さんたちが根回ししてくれたお陰とも言える。感謝してもしきれない。

クレアだと思ってた差出人は予想に反して、小梅先輩だった。小雪姫の姉で小雪姫とは違って面倒見のいいお姉さんという感じで一年の中でも人気の人だ。まあ、ダントツで人気なのは生徒会長であろうが、生徒会副会長である小梅先輩も多少の贔屓を入れたら十分に張り合えると思う。

非常に簡単な操作でメールは開く。件名はなにもなく焦っている様子が伺える。ここまできたらあの先輩のことだ、何が言いたいかわかる。非常に短い文だが要約すると、今朝の小雪姫のことに關する謝罪に付け加え、集会に来いという催促である。

魅夜の告げ口か、それとも壇上からちらつと見たらオレが居ないのに気づいたのか、どちらにしろ魅夜からお小言は回ってくるのだろう。少なくとも耳を引っ張ってとまではいかないが、魅夜の奴は集会や学校行事をサポートがちなオレを連れていきたい傾向にある。それもこれも集会をフケて、その後に先公にグチグチ言われるのが嫌だから学校を抜け出したりしたのがイけなかったのだろう。

携帯を持つようになってからは良くその手のメールがくるようになった。それを知っているからこそ将は魅夜の野郎が怒るとか言い出したのだ。オレはため息まじりに嫌味ったらしく返し、訪れたのは沈黙。それを破ったのは以外にも如月だった。

「和也、おめえあの後、どこ行ってた？」

「どこって、勝手じゃねえか」

あの後というのは単純にコンビニを出た後のことなのだろう。思

い当たる事は当然あのことでしかない。なぜ、それを気にかけるか疑問は残るものの、オレは適当にはぐらかす。ここで変に昨晚の出来事を変えるとオレの平穏な生活が脅かされるような気がして、恐怖心が煽られた。

それだけ、非日常ってことだよなあ……やっぱ。

「カズのことだから心配ないと思うけど、関わらないのが吉だよ」
「夜間の外出は特に、な」

諭すように将、語りかけるように如月が言う。恐らく、何があったのかは気付いてるのだろう、あれだけの事があったし、その痕跡までご丁寧に残ってるんだニュースか何かで報道されたに違いはない。

ひしゃげた遊具に抉られた地面、砕けたアスファルト。戦争でもあったかのような公園での出来事は非日常を色濃く表していた。そして関わるなという拒絶の色が、この2人はなんらかの形で“非日常”の渦中にいることを克明に表していた。

しかし、これは開けるな開けるなと言われてるみたいで興味が向かないと言ったら嘘になる。現にあの場にいたレナに対して問い詰めてしまっている。そして突き放され、ここでも突き放される。それはつまり、関わってしまったては此処には戻れないと同義……。

オレはおもむろにポケットの中から愛煙してるタバコを一本取り出しくわえる。しかしライターが見当たらずに、あの朝の一件で落としてしまったことに気付くと屋上から捨てる。結構この地域じゃ有名な銘柄だからフィルターだけでわかるかもしれない、校内にも愛煙家は何人もいる（大学付属であるから、大学生により校舎外の

敷地に吸殻が結構落ちていた。ため特定は難しいだろう。

まあ、何らかの事情により遅刻をして校舎を突っ切ろうとした人間の前に落ち、たまたま通りかかった先生に見つかからない限りそういったレアな不幸な現象は呼ばないであろう。あっても屋上から落ちてきたなんて誰が信じる？

本来的には普段利用者のいない屋上、それもオレや将、如月といった利用者が丁寧に掃除までしているんだ、普段確認している用務員すら気づかないように（と、言っても当直の教師や用務員が事細かに見ているかは定かではない。）なっている。それにこの屋上は部室棟などからの視覚にもなってる位置にあり、外から見て気づくのはあまりいない。

絶好の隠れスポットである。

「まあ、そんなときは頼むよ」

オレは空を仰ぎながら暢気にそう答える。

答えは風に流されたかのように聞こえなかった。屋上から吹き抜ける風は真夏だというのに心地よい。その風にそよいだ解答は、恐らくオレの中にあるものと同じなのだろう。縁浅はからぬ仲、何も言わなくとも分かっていることは幾つかある。将を通してで大して話す機会もない如月でさえ伝わるのはきっと、オレと如月の仲を取り持つ将が居るからこそなせる技なのだろう。

目元を覆うほど伸びていた髪が風に揺れる。そろそろ髪も切りどきか？ 意識せずに、オレは蒼海に浮かぶ白亜の星を眺めながら、意識を遠くに持っていた。

こんな物が現れようが、オレの世界は不変で揺るぎはない確立された物であって、^{たと}譬え変化はあっても、そこはオレの世界と隣接している関係者だけの世界にしか過ぎない。だから、オレは^{オレ}此処のままでいい。

レナ・フォード＝ライズ・ハールド……。彼女は、オレの世界に隣接しているのだろうか？

それとも、既に彼女は――…。

R e p l a y

悲鳴にも似た叫び声、振り返るまもなく襲ったのは謎の浮遊感と流れるように進む景色。天上には綺羅星が克明に輝きを放っていた。そして自分が仰向けに倒れていることに気付く。

「かつ」

息を吐き捨てたのは数秒した後だろうか、少なくとも肺に空気を取り込めず口から無様に吐き出すだけの結末となった。早鐘を打つ心臓で一気に^{モード}モードが切り替わった。急速に頭の中で情報の処理を行う。見慣れた公園だ、周りをみればおよその飛距離は割り出せる。

そこですぐに相手は人間の程度ではないことに気付く。ありったけの可能性が頭の中で逡巡する。耳を済ませるとゲル状の液体が蠢くような不快な音。正にモンスターである事を認めようとする耳、しかし人間のものではないと分かっているがら理解したがない頭。

すると頭に浮かんだのは連続暴行事件の犯人像。そもそも目撃証言が少なく、巷ではさまざまな噂が飛び交ってる。それで頭に妥協を求める。思考がまとまると目の前が鮮明になり、多くの視覚情報を取り込む。真上から何かが凄い勢いで落下してくるような風きり音に気付く、夜の闇にまぎれて気づいていなかったが、『何か』がものすごい勢いで――落ちてくるッ！？

無様な格好であることも気にせず飛び退く。強い衝撃は土を巻き上げ大きく削り、クレーターを公園のど真ん中に作り上げていた。その破壊力に思わず戦慄すら覚えたが確実にいえることがあった。

「デメエ……！」

目の前を舞う砂埃を心程度に手の甲で払い、着弾――もはや火薬を詰めた爆弾にも等しい奴を睨みつけると、球状の^{ボール}ような形態をとっていたそれは、RPGと言うスライムとかのように蠢くと、徐々に細長い形へと姿を変質させていく。

細長い腕は既に引きずられるような形、胴と頭は一体化したように首がなく、頭部と思える部分では目玉だけがギョロつと獲物を探すように動く。全体が墨汁かなんかで出来てるのか黒に染め上げられた身体に目玉は嫌にグロテスクで目立つものとなっていた。

その眼は、逃した獲物であるオレを捉えた。

『あ、ギアがgやうう』

鞭のようにしなやかな腕がしなり、振るわれる。凶悪な風きり音はその衝撃を表すのに十分なほどであった。その例として舞ってい

た砂埃はすべて飛ばされていった。軽い口笛を吹き驚嘆を表す。少なくとも情報を飲み込めないが、目の前に立ちふさがるなら――

「キメエんだよオ!!」

ぶん殴るだけだろーが!!!

中腰より低く、思いっきり屈み込む鞭のような腕を避けたオレは足のバネを最大限に用いて懷に飛び込む。視界は晴れて距離をつかむには逆に良い状況となった。大振りの鞭は返してオレにあてる余裕もなく、オレの固く握った拳はこの化け物を捉える。

踏み込む足に力をいれ、腕の力ではなく身体全身を使って――振り切る!!

正確に相手の中心を射抜く。腕の振りと筋肉で出せる拳には限界というものがある、体幹という身体のバランスを支える様々な筋肉、そのすべて伸縮作用。思いっきり絞られた筋肉は戻そうという働きにより――飛躍的に破壊力を増すツツ!

野球でいうピッチャーのようなもの、一瞬の爆発力。指先や腕だけでなく体全身で100キロを超える球を放つ仕組みからくりのひとつ。

「おい、マジかよ」

人体の破壊すら可能な武術、空手や柔道といった技の数々に相応する程の拳。並大抵の人間なら卒倒しても不思議ではない手応えはあった。だけど、

その拳はこの一つ目の化け物にめり込む事もなく、強靱な肉体に

よって受け止められた。拳から伝わる質感は固く、胎動していた。いや、胎動という表現よりは、脈動？

『か、かぐうううあああ』

「っ」

謎の奇声。絶叫にもほど近いそれにオレは咄嗟に退く。足りない、もう一度……？

本能の赴くままにもう一度後退しようとするが、後方には滑り台、潜ることや飛び退くことは出来たとしてもコイツの攻撃は尋常ではない。それを表すように大きく挟られた地面。たった一撃で起き上がるのも困難なほど、足が震えてしまってる程の——いや、これで済んだならまだ安い。もしかしたらあのまま起きられなかったかもしれない。どう移動しようがこの滑り台の破損は免れない。

それほどの破壊力を持つている異形いけいけの存在。よもやそんな相手に落ち着いてられるなと自分が信じられなくなる。そして、オレにまとわりつくような落ち着いた判断力と、確かに感じる高揚感。オレはこんな状況を楽しんでいるのか？ 自分でえ、わからなかった。

県内敵なしと周りから恐れられ、腕に覚えのある連中からは絡まれては退け。次第に喧嘩することが、実力を誇示することに存在意義がなかったオレはそうしていく内に何も残らなくなった。もう、オレに無謀な喧嘩を挑むのは少数。頭数を揃えた喧嘩でさえ滅多にない。

いつしか、自分はこの平穏な日常に満足していたのだろうか？

だから、ここまで昂たかぶる？

変化を求めなかったオレは――…、変わらない世界に諦めていたから？

「そんなの――…」

思い耽^{ふけ}た時間は思いの外長かった。既に鞭のような腕はしなり、その眼は確実にオレを捉えていた。ひとつの目玉だけなのに猛禽類のような鋭さが射抜く。殺意？ 違う、これはそんなものではないなら、

なんだっけ？

「わかるかよおおお！！」

理不尽な怒りが爆発した。同時にオレはその異形の存在に向かって駆ける。鋭い風切り音。脇目も触れずに直進することで回避は大幅に遅れ、直撃にかかる時間は短くなる。後方での轟音はプラスチックのような物が砕けるような音や、鉄がひしゃげるような音。頭上には長い奴の腕^{ムチ}。

助走をつけて前転。そうやって腕^{ムチ}の細かなコントロールが出来ない間合いに移動する。これに要した時間は一秒にも満たない。馬鹿げた身体能力だと自分で嘲^{あざけ}る。

だけだよ、本当に化け物じみてるのはここからなんだぜ？

足のバネ、そして先程と同じようにすべて筋繊維を縮^{ちぢ}こめる。先程、奴を殴った時に感じた硬質な感触と脈動。鞭のような強靱な腕――恐らくそのすべては筋肉のような物の働きかけによる。だから

脈に触れたように、ドクンドクンと、血を巡らせるような感触があった。鞭の威力も筋肉の収縮による作用、限界まで絞った筋肉を一気に開放のはずことで大きな破壊力を産む。そして一気に伸ばされた筋肉は戻ろうという働きも一度、薙ぐように戻る。

その結果、強靱な筋肉による鞭は完成する。異形のものだが知らないが人間ってのは筋肉を100%で仕様できないようにリミッターがかかっている、それがないと考えれば当然の威力。逆に余りにも弱々しく感じる。この程度なのかという先程までの自分とは対照的な物の考え。

（不思議と気分は悪くねえな）

むしろこの程度が相手なのかとさえ、残念な気持ちで一杯になる。

全身の筋肉バネの他にも、“チカラ”を加える。閃光が夜を淡く照らした。

そうや、レナの野郎がどこから見てるんだっけか？

目だけを動かしてブランコを確認。そこにレナの姿は見えなかった。よかったのか悪かったのか非常に疑問ではあるものの人の身ではならざる技これは、そんな見られてもいいものではない。対人ではまず禁止しているが、相手が異形の者ともあらば——いいよな？

誰に言い聞かせるわけでもなく、オレは溜め込んだそれを放さけぶつ。

「『龍滅掌』」

そこから先はあまり記憶していない。ある油断によって気を失っていた。それをレナに介抱されていたのが次の記憶。倒しきったという甘い油断と僅かに切り替えてしまったスイッチ。そして、無数の鞭打ちのあとが物語っているのは、気づいた時に公園のベンチでオレを介抱していたレナの哀れんだ顔だけであつた。

実はその時から嫌な熱を左腕は持つていた。それを鎮めたのはレナの小さく細い指先。そこから溢れ出した淡い光で、その光で熱がなかったかのように消えてしまった。応急処置でしかないから一週間程は強い衝撃を与えぬようにと、彼女は曖昧な表情で微笑んだ。

微笑ムヨウニ、泣イタ。

| Kazuya Amamiya in the NEXT WORLD
"ZERO"――
Don't you leave behind the matter that it is important?
That is the important "MEMORY" which you forgot.
I am crying to smile in this cruel world.
Remember it.
The "MEMORY" that it was left behind there
Then, one ANGEL
"Smile of Cruel Angel"
She is crying with one person.
Please call my name.
I am by the side of you even n

ow .

During the promised destiny .
With crying to snile .

オレと死神 和也編

{ The place where all promises
gather }

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4727p/>

オレと死神 Smile of Cruel Angel

2011年11月16日12時52分発行